

判断した。比較的出土遺物が豊富であることもその居住性、あるいは保管性の高さを物語っているようか。しかも灰釉陶器や大甕が出土していることは、他の竪穴式住居の出土遺物とそれほど隔たりを感じない。

これに比べ、第5から14号竪穴式住居跡は、第13号区画溝内に位置し、建物地形跡の周囲に子の建物をさけて形成されていた。しかもその形状は不整形で小規

模なものばかりであった。これらの竪穴状遺構からは、鉄滓や大量の焼土粒子の堆積を確認したため、鉄に係わる生産工房と、当初判断した。しかし第140・141号住居跡に見られるように細長い長方形の竪穴部を持った竪穴式住居跡が、建物地形跡の北側に隣接して存在していたことから、単なる工房跡とばかりはいえない。ここではその答えを保留しておくこととしたい。

(9) 鍛冶炉跡

中堀遺跡では、17基の鍛冶炉跡を検出した。鍛冶炉跡は、第12号、第13号区画溝に隣接したところと第53号住居跡、さらに第223号住居跡に隣接して検出した。

鍛冶炉の存在形態は様々である。第1・2号鍛冶炉は、第53号住居跡内の床面に確認した。隣接して安山岩製の鉄床石や比較的大形の砥石が出土しており、鍛造が行われていたことが明らかとなった。

第3号～5号鍛冶炉跡は、第1・2号掘立柱建物跡の北を区画するSD20の北に集中して検出した。旧地表面に直接形成された鍛冶炉跡である。上屋や建物等は確認できなかった。

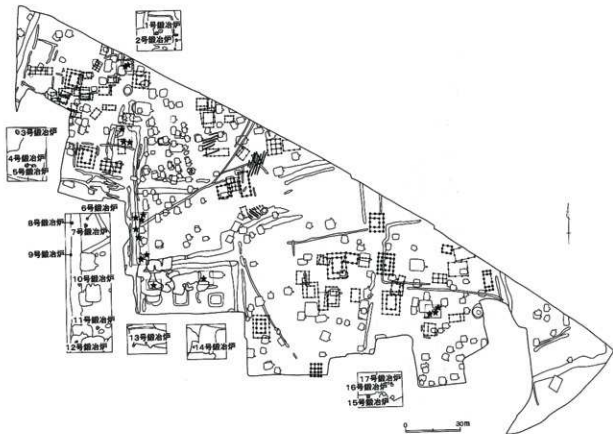
第6から12号鍛冶炉跡は、第12号区画溝が10cmほど

埋没した覆土上面や、区画溝の立ち上がり部に接して形成された。とくに11・12号鍛冶炉跡は、区画溝の窪地を利用して構築された第131・135号住居跡の床面に形成されていた。両者の近隣には、第13号区画溝の内側に形成された第13・14号鍛冶炉跡を検出した。

また第15から17号鍛冶炉跡は、第223号住居跡のカマドの煙道部に隣接し、集中的に確認した。

ただし鍛冶炉独自では、出土遺物に乏しく、周囲の遺構からその形成時期を判断せざるを得ないが、9世紀後半から10世紀前半にかけて形成された遺構と考えたい。

第747図 鍛冶炉跡全体図



第1号鍛冶炉跡 (第748図)

E-7グリッドで確認した。

第35号住居跡の床面のほぼ中央、第2号鍛冶炉の0.8m北東に位置した。

形状は楕円形で、規模は長軸0.57m・短軸0.28m・深さ0.07mであった。

中央部の長さ0.4m・幅0.2mが還元され硬化し、その周辺は被熱のため赤色に変化していた。また中央やや北寄りからやや大形の礫が、二点出土した。

第2号鍛冶炉跡 (第748図)

E-7グリッドで確認した。

第35号住居跡の床面のほぼ中央、第1号鍛冶炉の0.8m南西に位置した。第35号住居跡の第6号小穴に南端を破壊されていた。

形状は不整形で、規模は長軸0.42m・短軸0.37m・深さ0.13mであった。

中央から北の長さ0.38m・幅0.25mの範囲が還元され硬化し、その周辺は、被熱のため赤色に変化していた。

第3号鍛冶炉跡 (第748図)

H-7グリッドで確認した。

第6号区画溝の溝底に位置した。

形状は楕円形で、規模は長軸0.47m・短軸0.37mで、深さは0.37mと深かった。

還元された硬化面は、検出できなかったが、第1層が被熱により焼土化していた。また第2層に含まれる焼土も、他の鍛冶炉跡から出土している焼土と類似することから、鍛冶炉跡と判断した。

第4号鍛冶炉跡 (第748図)

I-7グリッドで確認した。

第20号溝の北、第5号鍛冶炉跡の西に並んで検出した。第5号鍛冶炉跡との距離は1.5mであった。

形状は楕円形で、規模は長軸0.48m・短軸0.33m・深さ0.17mであった。

中央部分の長さ0.41m・幅0.29mの範囲が、還元され硬化していた。その周辺は、被熱のため赤色に変化していた。また硬化面の上には、灰層が薄く堆積していた。

第5号鍛冶炉跡 (第748図)

I-7グリッドで確認した。

第20号溝の北、第4号鍛冶炉跡の東に並んで検出した。第4号鍛冶炉跡との距離は、1.5mであった。

形状は楕円形で、規模は長軸0.43m・短軸0.28m・深さ0.13mであった。

中央部分の径0.25mの範囲が、還元され硬化していた。その周辺は、被熱のため赤色に変化していた。また硬化面の上には、灰層が薄く堆積していた。

第6号鍛冶炉跡 (第748図)

M-8グリッドで確認した。

第12号竪穴状遺構の床面のほぼ中央、第7号鍛冶炉跡の北1.5mに位置した。

形状は円形で、規模は長軸0.33m・短軸0.31m・深さ0.07mであった。

中央北寄りの径0.12mの範囲が、還元され硬化していた。その周辺の長さ0.24m・幅0.18mの範囲は、被熱のため赤色化していた。

第7号鍛冶炉跡 (第748図)

M-8グリッドで確認した。

第12号竪穴状遺構の床面のやや南寄り、第6号鍛冶炉跡の南1.5mに位置した。

形状は不整形で、規模は長軸0.52m・短軸0.37m・深さ0.13mであった。

中央北寄りの長さ0.21m・幅0.17mの範囲が、還元され硬化していた。その周辺の長さ0.3m・幅0.29mの範囲は、被熱のため赤色化していた。

第748図 鋸冶炉跡 (1)

第1号鋸冶炉跡



第2号鋸冶炉跡



第1・2号鋸冶炉跡

- 1 褐色土 粘質土に炭化物粒子を含む
- 2 黒褐色土 炭化物を含む 大塚状
- 3 暗青灰色 礫化面 砂質で還元化している
- 4 暗赤褐色 炭土を含む礫化面

第3号鋸冶炉跡



第3号鋸冶炉跡

- 1 赤褐色土 炭土、白色粘土を部分的に含む
- 2 暗褐色土 炭土を多量に含む
- 3 暗褐色土 ビット履り方

第4号鋸冶炉跡



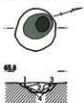
第4・5号鋸冶炉跡

- 1 黒褐色土 炭を多量含む 砂質
- 2 暗青灰色土 礫化面
- 3 赤褐色土 赤化面

第5号鋸冶炉跡



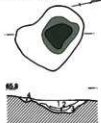
第6号鋸冶炉跡



第6号鋸冶炉跡

- 1 暗褐色土 炭土を少量含む、炭化物を多量に含む
- 2 黒褐色土 炭土粒子、炭化粒子を少量含む
- 3 灰色土 還元化
- 4 暗赤褐色土 炭土層

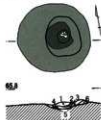
第7号鋸冶炉跡



第7号鋸冶炉跡

- 1 暗褐色土 炭土を少量含む、炭化物を多量に含む
- 2 灰色土 還元化
- 3 暗赤褐色土 炭土層
- 4 褐色土 炭化物を少量含む

第8号鋸冶炉跡



第8号鋸冶炉跡

- 1 褐色土 粘質、砂粒を含む
- 2 灰色土 炭化物層
- 3 暗褐色土 砂炭、炭、砂粒を含む
- 4 黒色土 炭化物層
- 5 赤褐色土 炭土層
- 6 暗褐色土

第9号鋸冶炉跡



第9号鋸冶炉跡

- 1 暗灰色土 還元化
- 2 に近い黄褐色土 半還元化
- 3 暗灰色土 スラッグ層
- 4 黒褐色土
- 5 に近い黄褐色土 炭土、炭化粒子、褐色砂粒を含む
- 6 暗褐色土 炭土、炭化粒子を含む
- 7 暗褐色土 白色粘土粒子を少量含む

第10号鋸冶炉跡

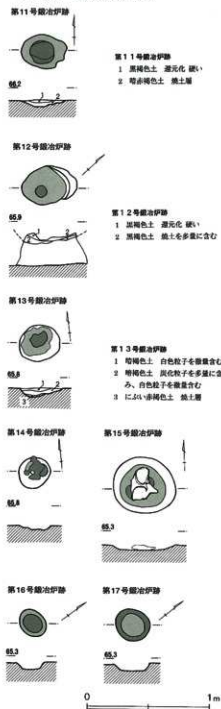


第10号鋸冶炉跡

- 1 灰色土 炭土層に炭
- 2 オリーブ黒色土
- 3 褐色土
- 4 黒褐色土



第749図 鍛冶炉跡(2)



第8号鍛冶炉跡(第748図)

M-7グリッドで確認した。

第12号竪穴状遺構の西、第12号区画溝の西壁寄りの底面に位置した。第7号鍛冶炉跡までは、東に2.5mであった。また第9号鍛冶炉跡までは、南に6.2mであった。

形状は円形で、規模は長軸0.58m・短軸0.53m・深さ0.06mであった。

中央やや東寄りの径0.21mの範囲が、還元され硬化していた。また被熱による赤色化の範囲は、鍛冶炉跡の掘り込みの規模を越え、径0.59mと広がっていた。

第9号鍛冶炉跡(第748図)

N-7グリッドで確認した。

第12号区画溝が、0.14mほど埋まった時点で造られた。第8号鍛冶炉跡までは、北に6.2mであった。第10号鍛冶炉跡までは、南に6mであった。

形状は円形で、規模は長軸0.28m・短軸0.27m・深さ0.22mであった。

中央部分は、径0.14mの範囲で還元され硬化していた。硬化面の周辺は、鉄滓や半還元された面がみられたが、赤色化の範囲は明確にできなかった。

第10号鍛冶炉跡(第748図)

N-7グリッドで確認した。

第12号区画溝が、0.17mほど埋まった時点で造られた。第10号鍛冶炉跡までは、北に6mであった。

形状は不正円形で、規模は長軸0.45m・短軸0.42m・深さ0.3mであった。

還元された面は、掘り込みの範囲と同じであった。還元面の上に鉄滓が出土した。被熱のため赤色に変化した部分は検出できなかった。

第11号鍛冶炉跡(第749図)

O-8グリッドで確認した。

第12号区画溝が、東へ曲がる隅に位置し、第12号鍛冶炉跡までの距離は、南西に5mであった。

形状は不正楕円形で、規模は長軸0.36m・短軸0.27m・深さ0.06mであった。

中央部の長さ0.18m・幅0.13mの範囲が還元され硬化していた。その周辺は、被熱のため赤色に変化していた。

第12号鍛冶炉跡 (第749図)

O-7グリッドで確認した。

第12号区画溝が、東へ曲がる隅に位置し、溝が0.18m埋まった時点で造られていた。第11号鍛冶炉跡までの距離は、北東に5mであった。

周辺は、焼土が多量に混入し、鍛冶炉跡の覆土と類似した土のため、確認に手間取り掘り過ぎた。そのため形状などは明らかにできなかったが、長軸0.44m・短軸0.31m・深さ0.18mと推定した。

中央やや南寄りの径0.09mの範囲が、還元され硬化していた。その周辺の長さ0.36m・幅0.31mの範囲は、被熱のために赤色に変化していた。

第13号鍛冶炉跡 (第749図)

Q-8グリッドで確認した。

第138号住居跡の床面の中央やや南寄りに位置した。

形状は円形で、規模は長軸0.33m・短軸0.3m・深さ0.14mであった。

中央部分の長さ0.14m・幅0.09mの範囲が還元され硬化していた。その周辺の長さ0.26m・幅0.2mの範囲は、被熱のため赤色化していた。

第14号鍛冶炉跡 (第749図)

P-11グリッドで確認した。

第14号竅穴状遺構の床面のほぼ中央に位置した。

形状は円形で、規模は長軸0.25m・短軸0.24m・深さ0.04mであった。

中央やや北寄りの部分が、長さ0.18m・幅0.14mの範囲で還元され硬化していた。周辺は、一部被熱のため赤色に変化していた。

第15号鍛冶炉跡 (第749図)

R・S-23グリッドで確認した。

第223号住居跡に隣接し、第17号鍛冶炉跡の東4.2mに位置した。

形状は円形で、規模は長軸0.51m・短軸0.45m・深さ0.06mであった。

中央部が長さ0.22m・幅0.12mの範囲で還元されていた。その周辺は、径0.36mの範囲で被熱のため赤色に変化していた。

鍛冶炉跡内から鉄滓と馬歯が出土した。

第16号鍛冶炉跡 (第749図)

R-24グリッドで確認した。

第223号住居跡のカマドの煙道部に隣接し、第17号鍛冶炉跡と並んで検出した。第17号鍛冶炉跡との距離は2mで、第15号鍛冶炉跡までは、4.2m西であった。

形状は楕円形で、規模は長軸0.24m・短軸0.19m・深さ0.07mであった。

中央部は、長さ0.15m・幅0.12mの範囲で還元され硬化していた。その周辺は、被熱のため赤色に変化していた。

第17号鍛冶炉跡 (第749図)

R-24グリッドで確認した。

第223号住居跡のカマドの煙道部先端に隣接し、第16号鍛冶炉跡と並んで検出した。第16号鍛冶炉跡との距離は2mで、第15号鍛冶炉跡までは、6.2m離れていた。

形状は円形で、規模は長軸0.28m・短軸0.25m・深さ0.07mであった。

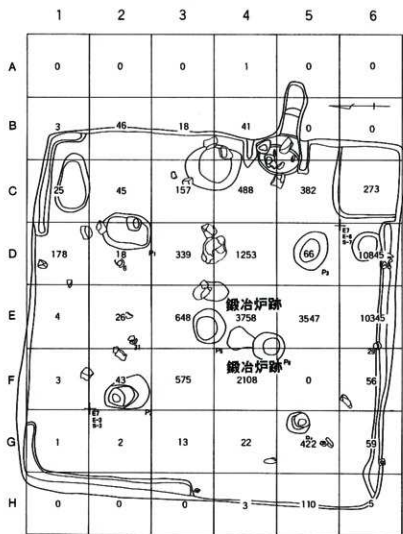
中央部は、径0.16mの範囲で還元され硬化していた。その周辺は、被熱のため赤色に変化していた。

第35号住居跡出土鉄滓について

第1・2号鍛冶炉跡を確認した第35号竅穴住居跡からは、大量の鉄滓が出土した。第750図は、第35号住居跡の覆土中に堆積した鉄滓の出土量(単位:g)を1㎡ごとに累積した数値である。また同図下は、同数値を基に出土量を縦の累積グラフとした。

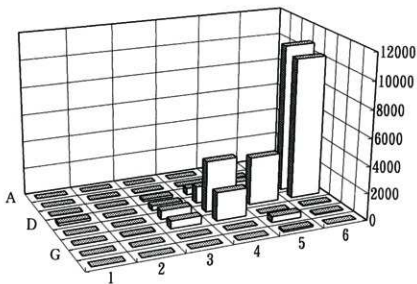
これによると第35号住居跡出土の鉄滓は、床面中央の鍛冶炉跡はもとより、鍛冶炉跡から南壁にかけて集中して出土した。とくに最も南よりの壁際で、10kgを超える出土量があり、この付近が、鉄滓の集中的な廃

第750図 第35号住居跡の鉄滓出土量



棄場所とも考えられる。

またこの竪穴式住居跡からは、すでに述べてきたように多数の鉄製品や大形の砥石、さらには叩打痕が全面に残る偏平な金床石と推定した大形の石が出土している。このことから第35号住居跡は、鉄生産に深く関わった竪穴住居跡と言えよう。



(10) 大甕埋設遺構

須恵器の大甕を地表下に埋設、あるいは設置した遺構が、中堀遺跡では、15ヶ所確認できた。この須恵器大甕を埋設した遺構は、北西から南東に向かって714号土壌から729号土壌と呼称した。

須恵器の大甕を埋設した土壌には、他の遺構との関わりから次のように分類することが可能である。

A 竪穴式住居跡の土間に直接、ないしは浅い掘り込みをもって大甕を設置した場合（例 第217号住居跡）。

B 掘立柱建物跡の土間に直接、ないしは掘り込みをもって大甕を設置した場合（例 第50号掘立柱建物跡）。浅い掘り込みをⅠ類、深い掘り込みをⅡ類とした。

C 建物外と考えられる地表面に深い掘り込みを

作り、大甕の肩部が、地表面に出る程度に埋設した場合（例 第723号土壌）。浅い掘り込みをⅠ類、深い掘り込みをⅡ類とした。

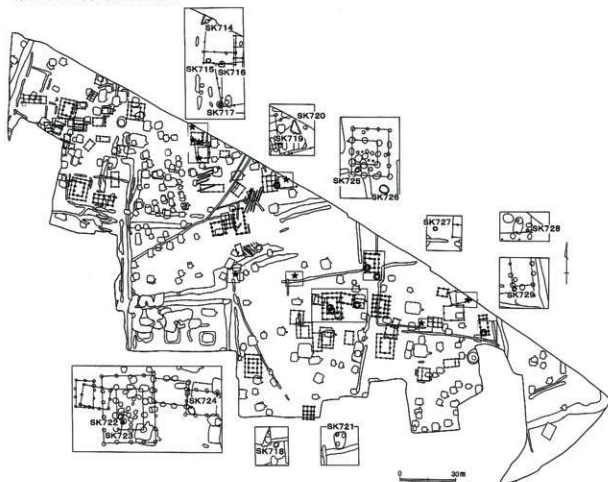
本章で扱ったのは、B類とC類である。ちなみにB類は、下図で白抜き星印は、掘立柱建物跡に大甕が伴う可能性があるとは判断したもの、星印は掘立柱建物跡に大甕が伴わないと判断したものである。

なおここでは、SK718を大甕埋設遺構として扱ったが、出土した遺物が、口縁部破片のみであったため、破損した破片を廃棄した土壌とも判断される。

またSK718・728については、遺構確認面が、旧地表より低かったため、本来は、深い掘り込みの中に埋置された可能性がある。

さらにSK715・716は、第28号掘立柱建物跡の屋内

第751図 大甕埋設遺構全体図



第 614 表 掘立柱建物跡と土器埋設遺構の関係

掘立柱建物跡建物内設置	地表か浅い掘り込み	SK714 (SB28)・SK717 (SB30・31)・SK719 (SB40)・SK720 (SB40)・SK722 (SB50)・SK723 (SB50)・SK724 (SB52)・SK725 (SB54)・SK726 (SB54)・SK729 (SB65)
掘立柱建物跡建物内設置	深い掘り込み	SK715 (SB28)・SK716 (SB28)
屋外設置	地表か浅い掘り込み	SK718・SK727
屋外設置	深い掘り込み	SK721・SK728

に設置されていたとは積極的に言い難い。

第714号土壌 (第752図)

G-11グリッドで確認した。

第28号掘立柱建物跡の北に位置した。焼土が少量に混入した確認のため確認作業に手間取った。当初、竪穴式住居跡として調査を始めたが、形状が不整形であることから土壌と判断した。また北が調査区外のため、形状など全容は明らかにならなかった。

検出した南辺は、長さ2.4m・深さ0.1mであった。

長軸方向は、N-25°-Wと推定した。

焼土を少量に含む覆土上層から須恵器の皿(5)、須恵器の高台付椀(2・3)、灰釉陶器の高台付椀(6)、土錘(12~26)などとともに大甕の破片が少量に出土した。ただし、復元できず図示できなかった。

遺構の切り合い関係はみられない。

1・2は、須恵器(HS)の高台付椀である。5は、須恵器(S)の皿である。

3・7・8は、緑釉陶器の高台付皿である。4・6

は、灰釉陶器の高台付椀である。

9は、須恵器(S)の四耳壺か。

10は、灰釉陶器の広口壺である。11は、須恵器(S)の甕である。

12から26は、土錘である。

27は、砥石である。

28は、棒状鉄製品である。

第715号土壌 (第752図)

G-11グリッドで確認した。

第28号掘立柱建物跡の庇に位置し、第716号土壌の西に並び検出した。第716号土壌との距離は2.2mであった。

形状は円形で、規模は長軸0.94m・短軸0.89m・深さ0.51mであった。土壌分類の円IC型であった。

長軸方向は、N-89°-Eであった。

大甕の破片は、覆土中位から出土した。破片はいずれも小さく、図示できなかった。

第 615 表 第 714 号土壌出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴径	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	11.8	4.8		5.4	B, E, G, I	良好	R	にぶい黄褐色	70	P-2
2	高台付椀	HS	13.0	4.4		5.0	B, E, G, I	良好	R	にぶい黄褐色	50	P-1
3	高台付皿	M					B	普通		淡緑	5	
4	高台付椀	K				8.0	B, D	良好		灰白 (やや黄味)	50	
5	皿	S	12.5	2.5		5.7	B	良好	R	黄	70	
6	高台付椀	K	16.0	5.0		8.2	B	良好		淡灰褐	20	P-2
7	高台付皿	M				B	B	良好		濃緑	5	
8	高台付皿	M				B	B	良好		淡緑	5	
9	四耳壺?	S				B	B	良好		青灰	5	
10	広口壺	K	17.0			D	B	良好		黄灰	10	P-2
11	甕	S	17.7			D	D	良好	R	灰	5	P-21

第752図 大甕埋設遺構・出土遺物(1)

SK714

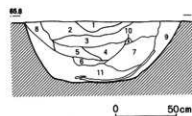
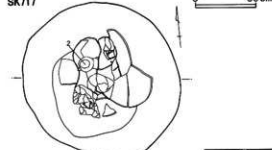


SK714

- 1 暗褐色土 粘土を多量に含み、炭化物、砂を少量含む
- 2 暗褐色土 粘土、炭化粒子、石を少量含む
- 3 暗褐色土 粘土、炭を少量含む
- 4 暗褐色土 砂利主体 暗褐色土を少量含む



SK717



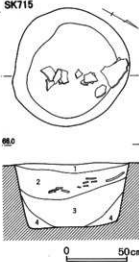
SK716

- 1 赤褐色土 灰色シルト質土に黄土ブロックを多量に含み、高褐色粒子を含む
- 2 暗褐色土 黄土ブロックを多量に含み、炭化材を含む
- 3 暗褐色土 黄土ブロックを多量に含む
- 4 暗褐色土 黄土ブロックを少量含む

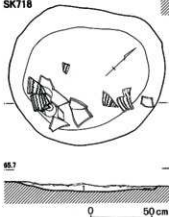
SK716

- 1 灰黄褐色土 暗褐色粘土に黄土粒子、炭化粒子を少量含む
- 2 灰黄褐色土 暗褐色粘土に砂質土を含む
- 3 暗褐色土 粘土、炭化物を少量含む

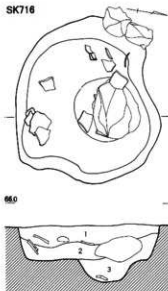
SK715



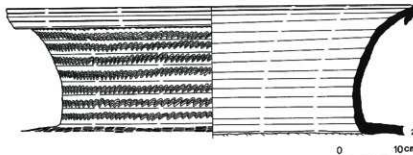
SK718



SK716



SK718



SK718

- 1 暗褐色土 粘土、炭化物を多量に含み、炭、黄土ブロック、礫を少量含む

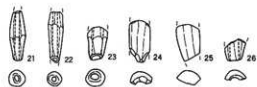
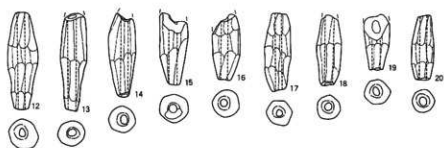
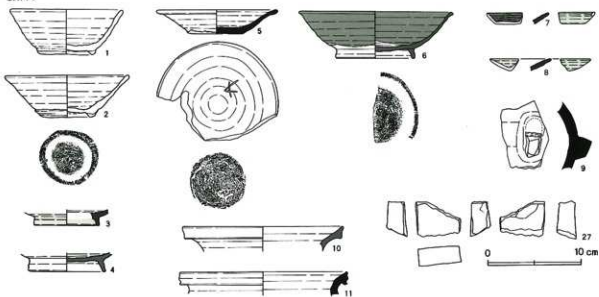
SK717

- 1 灰褐色土 粘土少量、炭化物若干含む 火山灰を多く含む
- 2 暗褐色土 粘土・炭化物を少量含む 火山灰を少量含む
- 3 灰褐色土 粘土まばらに少量、炭化物を少量含む 火山灰を少量含む
- 4 暗褐色土 粘土少量、炭化物わずかに含む 火山灰をわずかに含む
- 5 黒褐色土 粘土わずかに、炭化物を多く含む 火山灰はほとんど含まない

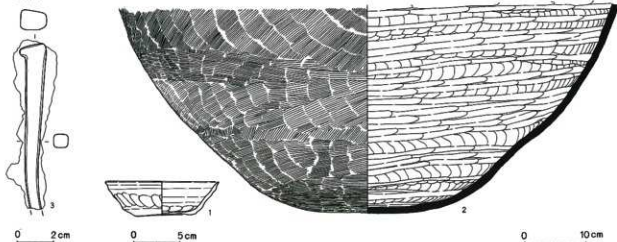
- 6 黒褐色土 粘土・炭化物を少量含む 火山灰はほとんど含まない
- 7 黒褐色土 粘土均等に少量、炭化物等に多く含む 火山灰はほとんど含まない
- 8 暗褐色土 粘土・炭化物をわずかに含む 火山灰はほとんど含まない
- 9 褐色土 粘土・炭化物をわずかに含む 火山灰はほとんど含まない
- 10 褐色土 ブロック状に腐植
- 11 暗褐色土 粘土わずかに、炭化物を少量含む 小礫混入 火山灰はほとんど含まない

第753図 大甕埋設遺構・出土遺物（2）

SK714



SK717



第 616 表 大甕埋設土壌出土土錐観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他	
1	に	ぶ	い	橙	50	0.9	0.3	1.7	C 2	II b	596	SK 726
12	褐		灰	100	5.1	1.5	0.4	10.3	C 1	I a	285	SK 714
13	褐		灰	70		1.4	0.5	8.2	C 1	II a	286	SK 714
14	灰		褐	80		1.4	0.5	7.0	C 1	III a	287	SK 714
15	褐		灰	30		1.5	0.4	5.9	C 1	II b	288	SK 714
16	に	ぶ	い	橙	50	1.4	0.3	5.6	C 1	III a	289	SK 714
17	褐		灰	100	4.0	1.4	0.3	6.8	C 1	I a	290	SK 714
18	褐		灰	60		1.3	0.4	4.8	C 1	III a	292	SK 714
19	褐		灰	30				3.7	C 1	II a	293	SK 714
20	褐		灰	100	3.4	1.2	0.5	4.4	C 1	II a	291	SK 714
21		橙		70		0.9	0.3	1.5	C 2	I a	590	SK 714
22	に	ぶ	い	橙	40	1.8	1.2	1.2	C 2	II b	591	SK 714
23	褐		灰	20		1.0	0.5	1.1	C 2	IV a	592	SK 714
24		褐		20				1.5	C 2	V	593	SK 714
25	褐		灰	100	2.0			1.3	C 2	V	594	SK 714
26	褐		灰	5				0.5	C 2	V	595	SK 714

第716号土壌（第752図）

G-11グリッドで確認した。

第28号掘立柱建物跡の底に位置し、第715号土壌の東に並び検出した。第715号土壌との距離は2.2mであった。

形状は不整形で中央やや北寄りか、円形に掘り込まれていた。その上に大形の川原石を置いていた。規模は長軸1.32m・短軸1.13m・深さ0.43mであった。土壌分類の不整 I A型であった。

長軸方向は、N-72°-Eであった。

大甕の破片は、覆土中位から円形の掘り込みにかけて出土した。破片は、いずれも小さく図示できなかった。

第717号土壌（第752図）

H-11グリッドで確認した。

第30・31号掘立柱建物跡の南西隅に位置した。第716号土壌から南に8mの距離であった。

形状は円形で、規模は長軸1.34m・短軸1.20、深さ0.49mであった。土壌分類の円 I C型であった。

第 617 表 第 717 号土壌出土遺物観察表

番号	器	種	種別	口径	器高	胴	底径	胎	土	焼成	釉	色	調	残存	出土位置その他
1	坏	A	V	H	12.0	3.6	6.3	B, D, E, H		不良		橙		100	
2	大	甕	S				14.0			良好		明	灰	20	

第 618 表 第 718 号土壌出土遺物観察表

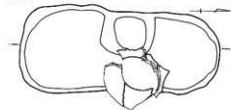
番号	器	種	種別	口径	器高	胴	底径	胎	土	焼成	釉	色	調	残存	出土位置その他
1		碗	S	12.3	3.8		6.5	B, C		良好		黄	灰	90	
2	大	甕	S				17.0	F, G, H		普通		灰		50	

第 619 表 第 719 号土壌出土遺物観察表

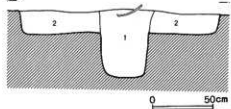
番号	器	種	種別	口径	器高	胴	底径	胎	土	焼成	釉	色	調	残存	出土位置その他
1	大	甕	S	49.2				B, C		良好		青	灰	30	
2	大	甕	S					B		良好		青	灰	10	

第754図 大甕埋設遺構・出土遺物(3)

SK719



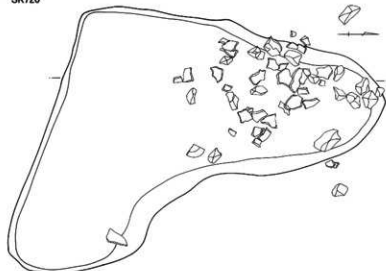
65.5



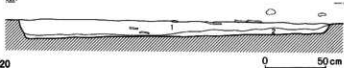
SK719



SK720



65.4

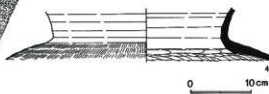
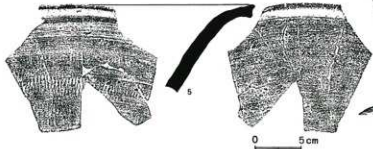


SK720

- 1 暗褐色土 炭を層状に含む 白色焼子を多数に含む 結核あり
- 2 暗褐色土 1層より 灰色味を帯びている 炭土、炭化穀子を少量含む 結核あり



SK720



長軸方向は、N-52°-Wであった。

大甕(1)は、底部から胴部中位までが出土した。土壌内に胴部中位まで埋め、第9層で掘り方との隙間を充填していた。胴部中位から口縁部にかけては、削平のためすでに失われていた。また底部から土師器坏(2)が正位に出土した。そのほか覆土中から鉄製品(3)が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。

2は、須恵器(S)の大甕である。

3は、鉄釘である。

第718号土壌(第752図)

N-13グリッドで確認した。

第170号住居跡の西に位置した。周辺は、住居跡・溝・土壌などの遺構が密集し、確認に手間取った。

形状は円形で、規模は長軸1.21m・短軸1.17m・深さ0.06mと浅かった。土壌分類の円ⅠA型であった。

長軸方向は、N-35°-Eであった。

大甕(2)は、口縁部の破片が土壌の底面より上位に出土した。口縁部より下位の破片は出土しなかった。

1は、須恵器(S)の碗である。2は、須恵器(S)の大甕である。

第719号土壌(第754図)

I・J-15グリッドで確認した。

周辺は、掘立柱建物跡・土壌群などの遺構が非常に密集し、確認に手間取った。

当初、第719号土壌の遺物と判断し調査を進めたが断面の観察や出土位置から40号掘立柱建物跡の第10号

柱穴とかかる可能性もあった。

形状は楕円形で、規模は長軸1.61m・短軸0.69m・深さ0.18mで、土壌分類の楕円ⅡB型であった。

長軸方向は、N-3°-Eであった。

遺構の切り合い関係は、第40号掘立柱建物跡より古く、第1土壌群Q土壌より新しかった。

大甕(1)は、第40号掘立柱建物跡の第10号柱穴に接し、第719号土壌の底面より上位に、口縁部を下にして出土した。

1・2とも、須恵器(S)の大甕である。

第720号土壌(第754図)

I-16グリッドで確認した。

第1土壌群のもっとも北に位置した。

周辺は、掘立柱建物跡・土壌群などの遺構が非常に密集し、確認に手間取った。

形状は不整形で、規模は長軸2.62m・短軸2.08m・深さ0.08mと浅かった。土壌分類の不整ⅡA型であった。

長軸方向は、N-1°-Wであった。

遺構の切り合い関係は、第1号土壌群R・S・T土壌より新しかった。

大甕(2~4)は、土壌中央から北の覆土中にかけて散乱した状態で出土した。大甕のほかに須恵器Ⅲ(1)、長頸壺の把手(6)が出土した。

1は、須恵器(HS)の皿である。

2から5は、須恵器(S)の大甕である。

6は、灰釉陶器の把手付長頸壺である。

第620表 第720号土壌出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈔	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	皿	H S	15.4				B, D, E	良好		灰 白	30	
2	大甕	S	36.2				B, D	良好		青 灰	30	
3	大甕	S	49.1				B, C	良好		灰	20	
4	大甕	S					B	良好		青 灰	30	
5	大甕	S					B	良好		青 灰	5	
6	把手	K					B	良好		灰 白	5	拡張部 被熱

第755図 大甕埋設遺構・出土遺物(4)

SK721



66.1



0 50cm

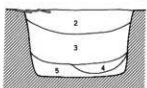
SK721

- 1 暗褐色土 黒土粒子を少量含む、砂利を多量に含む
- 2 暗灰褐色土 砂利、河原石を多量に含む
- 3 暗褐色土 暗褐色土を少量含む、砂利を多量に含む 結核あり
- 4 暗灰褐色土 SK721

SK722



66.2



0 50cm

SK722

- 1 暗褐色土 粘土、炭を多量に含む、砂利を少量含む
- 2 暗褐色土 粘土を多量に含む、炭、砂利を少量含む
- 3 暗褐色土 砂利主体 粘土、炭を少量含む

SK723



SK-723

- 1 暗褐色土 粘土、炭を多量に含む、砂を少量含む
- 2 暗褐色土 粘土を少量含む
- 3 暗褐色土 2層と同じだが砂利を含む

SK722

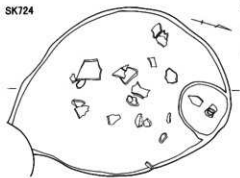
- 1 暗褐色土 粘土、炭を多量に含む、砂利を少量含む
- 2 暗褐色土 粘土を多量に含む、炭、砂利を少量含む
- 3 暗褐色土 砂利主体 粘土、炭を少量含む

66.2



0 50cm

SK724



65.7

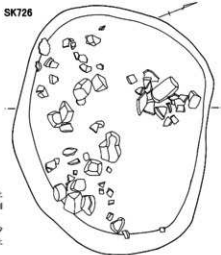


0 50cm

SK724

- 1 暗褐色土 粘土、炭を少量含む 砂利
- 2 暗褐色土 粘土を少量含む、暗灰褐色ブロックを少量含む
- 3 暗褐色土 白色粒子を含む

SK726



65.9



0 50cm

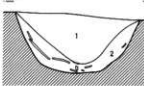
SK726

- 1 コげ茶色土層 炭化物・粘土粒子を多量に含む層で、砂利を多量に含む
- 2 黒色土層 砂質粘土の粘性的が少ない・粘土の多い土層で、粘土・炭化物を少量含む

SK725



65.9



0 50cm

SK725



0 5cm

SK725

- 1 コげ茶色土層 炭化物・粘土粒子を多量に含む層で、砂利を多量に含む
- 2 黒色土層 砂質粘土の粘性的が少ない・粘土の多い土層で、粘土・炭化物を少量含む

SK726



0 2cm

第721号土壌（第755図）

N-16グリッドで確認した。

第25号区画溝と第39号土壌が交わった北東に位置した。

砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

形状は長方形で、規模は長軸0.86m・短軸0.60m・深さ0.34mであった。土壌分類の長方I C型であった。長軸方向は、N-5°-Wであった。

遺構の切り合い関係は、第524号土壌より新しかった。

大甕は、掘り方を第2・3層で埋めたのち、底部付近を埋めて、掘えられていた。胴部から口縁部にかけて、削平のため欠損していた。底部付近の破片であり、図示できなかった。

第722号土壌（第755図）

P-18グリッドで確認した。

第50号掘立柱建物跡の身舎南西隅に、第723号土壌と並んで検出した。第723号土壌との距離は、0.5mであった。

周辺は、掘立柱建物跡・土壌・小穴などの遺構が非常に密集し、砂利層が確認面のため、確認作業は困難を極めた。

第50号掘立柱建物跡の身舎内から、多数の土壌を検出しており、同様の大甕を埋設した土壌と判断した。

第722号土壌の形状は楕円形で、規模は長軸1.38m・短軸0.89m・深さ0.24mであった。土壌分類の楕円I B型であった。

長軸方向は、N-18°-Eであった。

第723号土壌西から第722号土壌の覆土上層にかけては、大甕の破片が、散乱した状態で多量に出土した。

そのほか、周辺からは須恵器広口壺や把手付壺など、貯蔵にかかわる遺物が出土した。（遺物の図は、第50号掘立柱建物跡参照）

第723号土壌（第755図）

P-18グリッドで確認した。

第50号掘立柱建物跡の身舎南西隅付近に、第722号土壌と並んで位置した。第722号土壌との距離は、0.5mであった。

周辺は、掘立柱建物跡・土壌・小穴などの遺構が非常に密集し、砂利層が確認面のため、確認作業は困難を極めた。

第50号掘立柱建物跡の身舎内からは、多数の土壌を検出し、同様の大甕を埋設した土壌と判断した。

第723号土壌の形状は楕円形であった。規模は長軸1.05m・短軸0.89m・深さ0.67mであった。土壌分類の楕円I D型であった。

長軸方向は、N-70°-Wであった。

遺構の切り合い関係は、第528号土壌より新しかった。

大甕（第541図60）を掘える場所を一旦深く掘り下げ、第3層によって埋設したのち、底部から胴部下位までを土壌内に入れたと判断した。口縁部から胴部中位にかけては、削平により大部分が失われていたが、一部が底部内に落ち込むように出土していた。（遺物の図は、第54号掘立柱建物跡参照）

第724号土壌（第755図）

P-19・20グリッドで確認した。

第52号掘立柱建物跡の身舎南西隅に位置した。

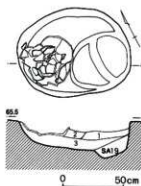
周辺は、掘立柱建物跡・土壌・小穴などの遺構が非常に密集し、確認に手間取った。

第621表 第725号土壌出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鋳	底径	胎土	焼成	釉薬	色調	残存	出土位置その他
1	高台付皿	N S	127	26		62	B, E, I	普通		灰黄褐	40	
2	鉄鉢	S	217				B, D	良好		灰白	20	

第756図 大甕埋設遺構・出土遺物(5)

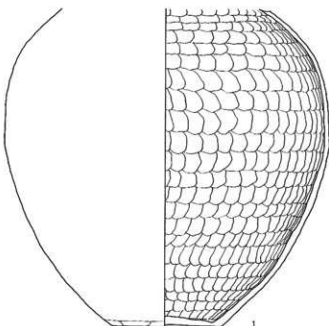
SK727



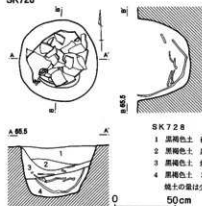
SK727

- 1 暗褐色土 焼土多く 灰を少量に多く含む 砂粒混じり しまりなし
- 2 暗褐色土 焼土多く 灰少量含む 砂粒混じり しまりなし
- 3 灰褐色土 礫 砂を主体とする 焼土 灰わずかに含む しまりなし

SK727



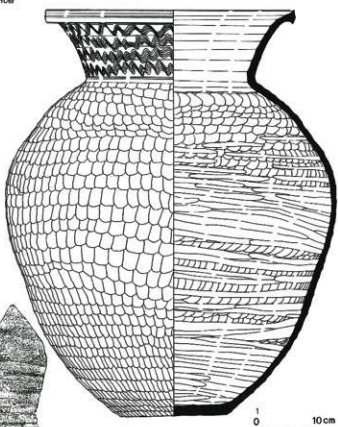
SK728



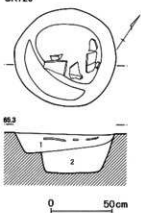
SK728

- 1 黒褐色土 砂礫を多量に含む
- 2 黒褐色土 炭化物、砂礫を含む
- 3 黒褐色土 焼土、炭化物、砂礫を含む
- 4 黒褐色土 3層に類似するが炭化物 焼土の量は少ない

SK728



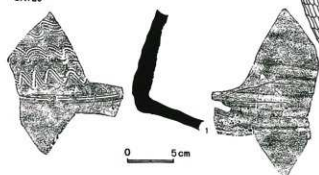
SK729



SK729

- 1 灰褐色土 焼土少量、炭化物若干含む 火山灰を多く含む
- 2 暗褐色土 焼土、炭化物を少量含む 火山灰を少量含む

SK729



形状は楕円形で、規模は長軸1.67m・短軸1.32m・深さ0.12mと浅かった。北端部分が、小穴状に浅く掘り込まれていた。土壌分類の楕円ⅡB型であった。

長軸方向は、N-16°-Wであった。

遺構の切り合い関係は、第52号掘立柱建物跡より古かった。

大甕は、底面から覆土中位にかけて出土したが、小破片が多く図示できなかった。

第725号土壌（第755図）

N-20グリッドで確認した。

第54号掘立柱建物跡の南庇の南西隅に位置した。

周辺は、掘立柱建物跡・小穴などの遺構が多く、焼土混じりの砂利層が確認面であったため、確認作業は困難を極めた。

第54号掘立柱建物跡の身舎内は、土壌や小穴を多数検出し、同様の大甕を埋設した遺構と判断した。

第725号土壌の形状は円形で、規模は長軸1.00m・短軸0.93m・深さ0.43mで、土壌分類の円ⅠC型であった。

長軸方向は、N-90°-Eであった。

大甕（第557図94）は、土壌内に底部から胴部下位を埋設していた。胴部中位から口縁部にかけては、大部分が削平により失われていた。口縁部の一部が、底部内に落ち込むように出土した。そのほか、須恵器高台付皿、須恵器鉄鉢形土器が出土した（遺物の図は第

54号掘立柱建物跡参照）。

1は、須恵器（NS）の高台付皿である。2は、須恵器（S）の鉄鉢模倣土器である。

第726号土壌（第755図）

N-21グリッドで確認した。

第54号掘立柱建物跡の南に位置した。

周辺は、掘立柱建物跡・小穴などの遺構が多く、焼土混じりの砂利層が確認面であったため、確認作業は困難を極めた。

形状は楕円形で、規模は長軸1.96m・短軸1.55m・深さ0.20mであった。土壌分類の楕円ⅡB型であった。

長軸方向は、N-65°-Wであった。

大甕は、覆土上層から中位にかけては、破片が散乱した状態で多量に出土したが、図示できるものはなかった。

そのほか土錘（1）が出土した。

第727号土壌

Q-23グリッドで確認した。

第62号掘立柱建物跡の西に位置した。

周辺の遺構は、比較的疎らだが、砂利層が確認面がのため、確認作業は困難であった。

形状は楕円形で、規模長軸0.92m・短軸0.66m・深さ0.23mであった。土壌分類の楕円ⅠB型であった。

長軸方向は、N-62°-Wであった。

第 622 表 第 727 号土壌出土遺物観察表

番号	器種	種類	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	大甕	NS				17.6	B, E, H	普通		黄 橙	60	

第 623 表 第 728 号土壌出土遺物観察表

番号	器種	種類	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	大甕	S	40.0	64.8		16.6	B	良好		青 灰	80	

第 624 表 第 729 号土壌出土遺物観察表

番号	器種	種類	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	大甕	S					B	良好		青 灰	5	

遺構の切り合い関係は、第19号柵列跡第7号柱穴より新しかった。

大窠(1)は、掘り方を浅く第3層で埋め、その上に底部を据えていた。胴部下位から口縁部にかけては、大部分が削平によって失われていたが、一部は底部内に落ち込んで出土した。

1は、須恵器(NS)の大窠である。

第728号土墳(第756図)

O・P-25・26グリッドで確認した。

第41号掘立柱建物跡の身舎の南東隅に位置した。

周辺の遺構は、比較的疎らであったが、砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。

形状は円形で、規模は長軸0.67m・短軸0.62m・深さ0.39mであった。土壌分類の円IC型であった。

長軸方向は、N-3°-Wであった。

大窠(1)は、土壌内に肩部まで埋設していた。口

縁部は、胴部内に落ち込んで出土し、ほぼ完形に復元できた。

1は、須恵器(S)の大窠である。

第729号土墳(第756図)

Q-26グリッドで確認した。

第65号掘立柱建物跡の南庇内に位置した。

周辺は、掘立柱建物跡・土壇・溝などの遺構が密集し、砂利層が確認面のため、確認作業に手間取った。

形状は円形で、規模は長軸0.80m・短軸0.78m・深さ0.24mであった。北を楕円形に掘り込んでいた。土壌分類の円IB型であった。

長軸方向は、N-10°-Eであった。

口縁部の破片を中心として、覆土の第1層から少量出土した。図示できたのは(1)だけであった。

1は、須恵器(S)の大窠である。

(11) 土器埋設遺構

中堀遺跡では、14基の土器埋設遺構を検出した。

ここにいう土器埋設遺構は、いわゆる「地鎮」や埋
甕など祭祀にかかるとされる、土器を地表下に埋設し
外見上は確認することの困難な遺構を指すこととし、
大甕を据えた土壌などについては、前章で扱うことと
した。

土器埋設行為を示す遺構には、次の三形態が認めら
れた。

A 土師器の坏を一点は上を向けて、一輪はその上に
伏せておき、土で地表面まで被覆したもの。

第3・4号土器埋設遺構など

B 土師器の坏と長頸瓶を浅い土壌状の掘り込み埋
設したもの。

第1・5号土器埋設遺構など

C 土師器の甕を二点横倒しし、口縁部を合わせ口と
したもの。

第12号土器埋設遺構

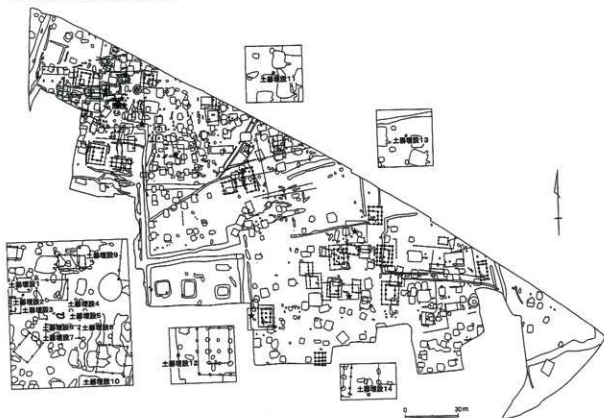
D 口縁部を打ち欠いた長頸瓶を土壌に据え、須恵器
の高台付碗を欠損部に伏せて蓋としたもの

第2号土器埋設遺構

土器埋設遺構で出土した土器は、土師器が多かった
が、残存状況が悪く、図化できたものは少なかった。

出土の傾向は、第1～10号土器埋設遺構が、第1・
2号掘立柱建物跡の北側に集中して確認できたことか
らこの領域が、中堀遺跡内でも古代の祭祀にかかる重
要な地点であったことは間違いないだろう。

第757図 土器埋設遺構全体図



第1号土器埋設遺構 (第758図)

F-6グリッドで確認した。

第39号住居跡の南東隅に位置した。

周辺は、堅穴式住居跡・土壇・小穴などが密集し、土器埋設遺構14基の内、9基(第1～9号)が集中していた。第2号土器埋設遺構と近接し、2mの距離であった。

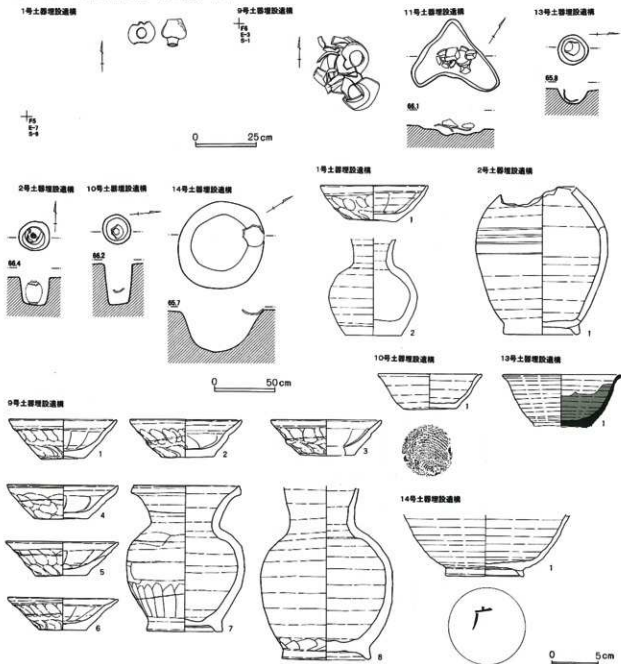
当初は、第39号住居跡の遺物と考えたが、床面から

浮いた状態での出土し、一般の堅穴式住居跡からの出土遺物の器種構成と異なることから第39号住居跡の窪みを利用した祭祀にかかる遺構と判断した。

遺物は、土師器杯(1)が逆位で出土し、その脇から須恵器小形瓶(2)が、口縁部を南に向け倒れて出土した。なお須恵器の小形壺(2)の口縁部は出土しなかった。

1は、土師器の杯BVである。

第758図 土器埋設遺構・出土遺物(1)



2は、須恵器（HS）の小形壺である。口縁部が欠損している。

第2号土器埋設遺構（第758図）

F-6グリッドで確認した。

第9号掘立柱建物跡の西に位置し、第1号土器埋設遺構から、南西に2mであった。

周辺は、竪穴式住居跡・土壌・小穴などの遺構が密集し、土器埋設遺構14基のうち、9基（第1～9号）が集中していた。

径0.24m・深さ0.22mの掘り込みに口縁部を打ち欠いた須恵器の長頸壺（1）を入れ、口縁部を打ち欠いた須恵器の坏で蓋をしていた。

1は、須恵器（HS）の長頸壺である。胴部上位以上が欠損している。

第3号土器埋設遺構（第759図）

G-6グリッドで確認した。

第9号掘立柱建物跡と第25号掘立柱建物跡の間に位置した。

周辺は、土器埋設遺構14基のうち、9基（第1～9号）が集中し、とくに第3～8号土器埋設遺構は、狭い範囲に分布していた。

第4号土器埋設遺構とは2m、第6号土器埋設遺構とは2.7mであった。

径0.2m・深さ0.12mの浅い掘り込みに土師器の坏（1）を正位に設置し、同型式の土師器の坏で蓋をしていた。

1は、土師器の坏ANである。

第4号土器埋設遺構（第759図）

G-6グリッドで確認した。

第9号掘立柱建物跡と第25号掘立柱建物跡の間に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壌・小穴などの遺構が密集していた。土器埋設遺構14基中、9基（第1～9号）が集中し、とくに第3～8号土器埋設遺構は、狭い範囲に存在した。

第3号土器埋設遺構とは2m、第7号土器埋設遺構とは3.2mであった。

径0.2m・深さ0.05mの浅い掘り込みに土師器の皿（1）を正位に設置し、同型式の土師器の坏で蓋をしていたと思われるが、削平で失われていた。

1は、土師器の皿である。

第5号土器埋設遺構（第759図）

G-6グリッドで確認した。

第9号掘立柱建物跡と第25号掘立柱建物跡の間に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壌・小穴などの遺構が密

第625表 第1号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他	
1	坏	B V	H	11.4	3.9		5.2	B, D, E	普通	淡	橙	80	口縁部欠損
2	壺	HS					5.9	B	普通	淡灰褐	40		

第626表 第2号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	長頸壺	HS		7.7			B, E	やや不良		淡黄褐	100	

第627表 第3号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他	
1	坏	A IV	H	12.5	3.5		8.4	B, C, E	普通	淡	橙	100	

集していた。土器埋設遺構14基中、9基（第1～9号）が集中し、とくに第3～8号土器埋設遺構は、狭い範囲に存在した。第3・4号土器埋設遺構とは0.5mであった。

長軸1.69m・短軸0.65m・深さ0.15mの楕円形の掘り込みであった。底面の西が不整形に深く掘り込まれていた。

遺物は、土師器の坏（1）、須恵器の高台付碗（2）、灰釉陶器の段皿（3）、須恵器の小形壺（4）などが出土した。また不整形の掘り込みから大形の礫が出土した。

1は、土師器の坏AⅡである。

2は、須恵器（NS）の高台付碗である。

3は、緑釉陶器の段皿である。口縁部が欠損している。

4は、須恵器（S）の長頸壺である。胴部上位以上が欠損している。

第6号土器埋設遺構（第759図）

G-6グリッドで確認した。

第5号土器埋設遺構の南、第25号掘立柱建物跡の身舎内に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壇・小穴などの遺構が密集していた。土器埋設遺構14基中、9基（第1～9号）が集中し、とくに第3～8号土器埋設遺構は、狭い範囲に存在した。

第6・7・8号土器埋設遺構を結ぶ線は、第25号掘立柱建物跡の棟行と平行していた。第7号土器埋設遺構とは2.9mであった。

径0.19m・深さ0.03mの浅い掘り込みで、土師器の坏（1）を正位に設置していた。土師器坏で蓋をしていたと思われるが、削平で失われていた。

1は、土師器の坏AⅣである。

第7号土器埋設遺構（第759図）

G-6グリッドで確認した。

第5号土器埋設遺構の南、第25号掘立柱建物跡の身舎内に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壇・小穴などの遺構が密集していた。土器埋設遺構14基中、9基（第1～9号）

第628表 第4号土器埋設遺構出土物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	皿	H	144	2.6		8.8	D, E, H	良好		橙	80	

第629表 第5号土器埋設遺構出土物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅡ	H	123	3.8	6.5	B, D, E, H	普通		暗橙	80	
2	高台付碗	NS	132	5.1		5.7	B, E, I	良好		灰	60	
3	段皿	M				5.5	B	良好		濃緑	30	
4	長頸壺	S				5.5	B	良好		淡灰白	30	

第630表 第6号土器埋設遺構出土物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅥ	H	128	3.7	7.8	B, D, E	普通		淡橙	90	
2	坏	AⅣ	H	123	3.5	8.0	B, E	普通		淡黄橙	60	

第631表 第7号土器埋設遺構出土物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	AⅣ	H	99	4.6	8.1	B, D, E	普通		橙	60	

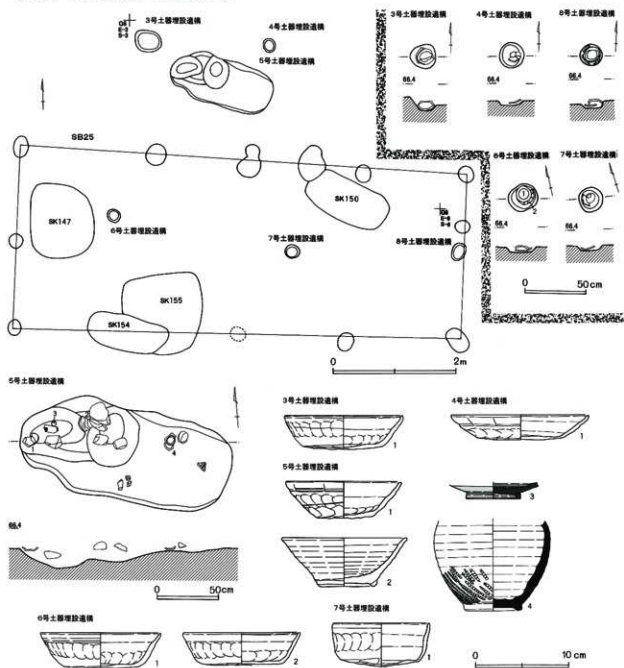
が集中し、とくに第3～8号土器埋設遺構は、狭い範囲に存在した。

第6・7・8号土器埋設遺構を結ぶ線は、第25号掘立柱建物跡の棟行と平行していた。第6号土器埋設遺構とは2.9m、第8号土器埋設遺構とは2.7mであった。

径0.23m・深さ0.05mの浅い掘り込みで土師器の坏(2)を設置し、同型式の土師器の坏(1)で蓋をした。

1・2は、土師器の坏である。1は、坏AMである。2は坏ANである。

第759図 土器埋設遺構・出土遺物(2)



第8号土器埋設遺構 (第759図)

G-6グリッドで確認した。

第5号土器埋設遺構の南、第25号掘立柱建物跡の東柱筋の中央に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壇・小穴などの遺構が密集していた。土器埋設遺構14基中、9基(第1~9号)が集中し、とくに第3~8号土器埋設遺構は、狭い範囲に存在した。

第6・7・8号土器埋設遺構を結ぶ線は、第25号掘立柱建物跡の棟行と平行していた。第7号土器埋設遺構とは2.7mであった。

径0.18m・深さ0.07mの浅い掘り込みで土師器の坏を設置し、同型式の土師器の坏で蓋をした。

第9号土器埋設遺構 (第758図)

F-6グリッドで確認した。

第37号住居跡の北西隅に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壇・小穴などの遺構が密集していた。土器埋設遺構14基中、9基(第1~9号)が集中していた。

当初は、第37号住居跡の遺物と考えたが、床面から浮いた状態でまとまって出土し、土師器の小形壺など一般の竪穴式住居跡の出土遺物にはない組成のため、第39号住居跡の窪みを利用した祭祀にかかる遺構と判断した。

欠損品や破片が多く、故意に破壊したのちにまとめて置いたと推定した。

1から6は、土師器の坏である。1・2・4から6は、坏BVである。3は、坏Bである。3は底部が欠損している。

7・8は、須恵器(HS)の壺である。8は口縁部が欠損している。

第10号土器埋設遺構 (第758図)

H-7グリッドで確認した。

第26号掘立柱建物跡の第1号柱穴の脇に位置した。

周辺は、土壇・溝・小穴などが密集していた。

径0.22m・深さ0.31mと、深い掘り込みの底面からやや浮いた状態で須恵器の坏(1)が、正位で出土した。

1は、須恵器(HS)の碗である。

第11号土器埋設遺構 (第758図)

J-9グリッドで確認した。

第77・89号住居跡の間に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土壇・溝・小穴などの遺構が密集していた。

形状は不整三角形で、1辺の長さ0.61m・深さ0.07mの浅い掘り込みであった。土師器の坏を逆位に設置し、その横に口縁が重なるように、同様の土師器坏を

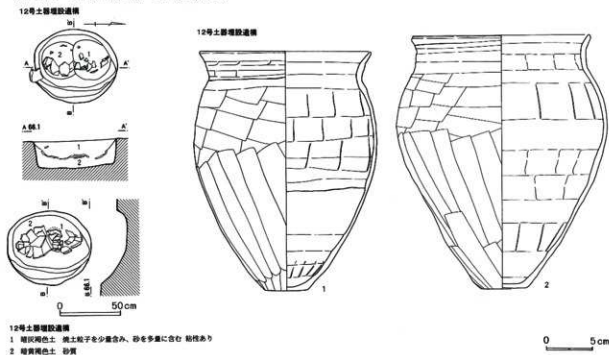
第632表 第9号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B V	H	11.4	4.2	4.5	B, D, E, H	普通		橙	70	
2	坏	B V	H	11.6	4.0	5.6	B, C, E	良好		黄 橙	70	
3	坏	B	H	11.5	3.9	5.7	B, D, E	普通		淡 橙	30	
4	坏	B V	H	11.5	3.6	5.5	B, C, E	良好		乳 橙	70	
5	坏	B V	H	11.8	3.7	5.5	B, H	良好		淡 橙	90	
6	坏	B V	H	11.6	3.4	5.1	B, D, E	良好		橙	70	
7	壺	HS	H S	11.1	15.5	7.8	B, C, D	普通		淡 橙	90	口縁部一部欠損
8	壺	HS	H S			8.8	B, E	不良		灰 濁	90	口縁部欠損

第633表 第10号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	碗	HS	10.8	3.8		5.6	B, E, H	良好		淡 黄	75	

第760図 土器埋設遺構・出土遺物（3）



12号土器埋設遺構

1 埴間褐色土 焼土粒子を少量含み、砂を少量に含む 胎性あり

2 埴間褐色土 砂質

正位に設置し、さらにその上に拳大の石を置いていた。

(1・2)を横位に合わせ口にして置いた。上半分は、削平のため欠損していた。

第12号土器埋設遺構（第760図）

S-13グリッドで確認した。

第42号掘立柱建物跡の西、第22号区画溝の南端から6 mに位置した。西は調査区外に接していた。

形状は楕円形で、規模は長軸0.67 m・短軸0.59 m・深さ0.21 mであった。

掘り方を半分ほど埋め戻し（第2層）で、土師器甕

第13号土器埋設遺構（第758図）

N-19グリッドで確認した。

第25号区画溝の南、第187・186号住居跡の間に位置した。

周辺は、竪穴式住居跡・土填・溝などがみられたが、

第634表 第12号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
2	甕 A III b	H	18.0	25.4		4.5	B, E, H, K	良好		橙	8	
2	甕 B II a	H	21.9		1.6		B, C, E, H	普通		にぶい橙	20	

第635表 第13号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	S	12.4	6.1				良好		灰	80	

第636表 第14号土器埋設遺構出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	NS				8.0		良好		灰白	50	墨書

比較的疎らであった。

径0.24m・深さ0.11mの浅い掘り込みに須恵器の高台付椀(1)を正位で設置していた。

1は、須恵器(S)の高台付椀である。高台が欠損している。黒色の付着物が内面体部から底部にかけて確認できる。漆の痕跡と考えられる。

第14号土器埋設遺構(第758図)

R-19グリッドで確認した。

第46・53号掘立柱建物跡の間に位置した。

周辺は、土壌・小穴などがみられたが、比較的疎らであった。

形状は円形で、規模は径0.75m・深さ0.34mと大きく深かった。掘り込みの北端に須恵器の高台付椀(1)を正位に設置していた。口縁部は、削平のため欠失していた。

1は、須恵器(HS)の高台付椀である。底部外面に墨書「广」がみられる。

(12) 馬骨・人骨

馬骨・人骨を出土した遺構について一括して本章で扱うこととする。なお馬骨・人骨の自然科学的分析については、附編を参照していただきたい。

調査区全体で馬骨、とくに馬歯は、16ヶ所で出土が確認できた。その分布は、南西部の第12・13号区画溝の周囲に集中していた。なかでも第20号住居跡の覆土中から出土した一体は、比較的残存状況がよく、胸部上半の馬骨を確認できた。

人骨は、第28号区画溝内に構築された第730号土壌に埋葬された1体だけである。石組の墓室に埋葬されていた。

それぞれ供伴する遺物が少なく、時期の判断は難しいが、周辺遺構との関連から9世紀後半から10世紀のものだと判断した。

(1) 馬の歯

- 第11号住居跡 西壁の中央から少量出土した。
- 第121号住居跡 2号土壌内で下顎骨が出土した。
- 第125号住居跡 南壁のやや西寄りから出土した。
- 第133号住居跡 中央の第134号住居跡と接した覆土中より、少量出土した。
- 第140号住居跡 北壁の壁際から少量出土した。
- 第145号住居跡 西壁の中央から少量の出土した。
- 第234号土壌 覆土中より少量出土した。
- 第419号土壌 覆土中より少量出土した。
- 第447号土壌 覆土中より少量出土した。
- 第4土壌群A土壌 覆土中から下顎骨が出土した。
- 第4土壌群B土壌 覆土中より、下顎骨が出土した。
- 第19号区画溝の埋没後に造られたJ-13グリッドの1号小穴では、覆土の上位より少量出土した。

第761図 馬骨・人骨出土遺構全体図



第15号鍛冶が跡 窪みから馬の歯が出土した。

第13号区画溝 北西隅の覆土中から少量出土した。

第14号区画溝 中央の覆土中から、少量出土した。

(2) 馬の骨

第19号住居跡から第20号住居跡にかけて、一頭分の馬の骨が出土した。頭は東に向け、背を北に向けていた。頭骨から前足にかけては、良好に残り頭骨は、ほぼ完全に残っていた。

竪穴式住居跡の床面から、浮いた状態で出土し、住居跡の埋没過程で窪みを利用して埋葬したことが土層の断面観察からわかった。

(3) 人骨

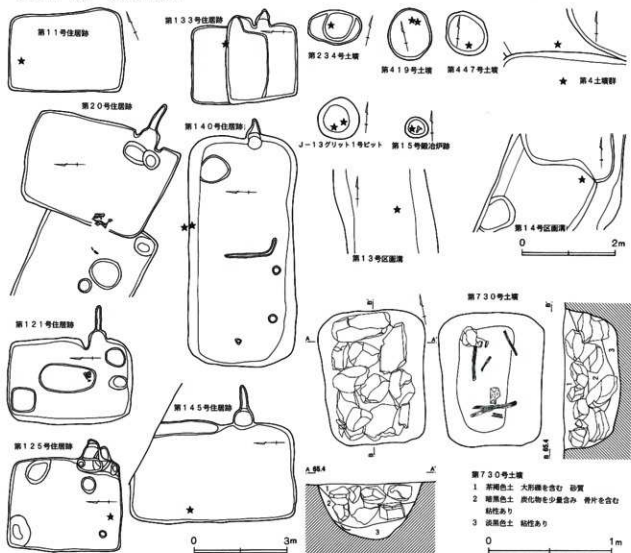
第28号区画溝を遮断して設置した第730号土壇は、人骨を埋葬した墓墳であった。第631号土壇と第629号土壇の間の、P-21グリッドで確認した。

形状は長方形で、規模は長軸1.05m・短軸0.77m・深さ0.43mで、土壇分類の長方I C型であった。

長軸方向は、N-8°-Eであった。

土壇の底面より、北に頭部を置く人骨を検出した。人骨の上、土壇の上位は、11個大形の礫を使用して土壇の掘り方に合わせ長方形に整然と石組されていた。直方体状に粗く整形した礫もあったが、ほとんど自然石がそのまま使用されていた。

第762図 馬骨・人骨出土地点



(13) 畝状遺構・風倒木跡

ここでは畝状遺構と風倒木跡について述べることにする。なおここで畝状遺構とした遺構は、小形で浅い数条の溝が、等間隔に並行して掘削された跡である。

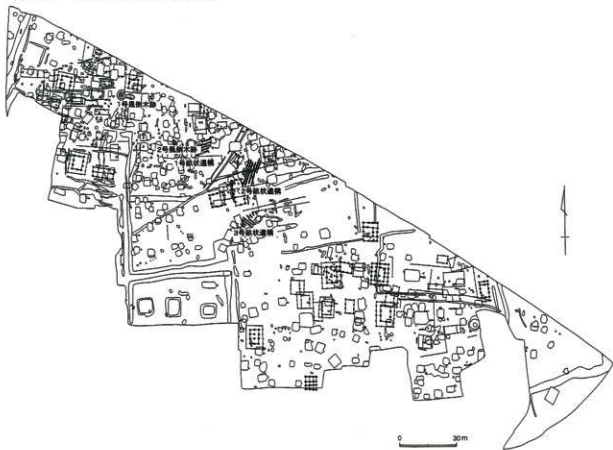
調査区の中央部に3ヶ所確認できたが、それぞれ溝の走行方向は異なっていた。溝の内部からは、ほとんど遺物が出土しなかったため、遺構の構築時期の判断は難しかったが、古代の遺構と推定した。

畝状遺構は、遺構確認作業中に削り取られた可能性

もあり、本来はさらに多くの畝状遺構が存在したと推定できる。

風倒木跡は、2ヶ所確認した。第1号井戸跡に隣接した場所と、住居跡が密集する中央部である。前者と第1号井戸跡との関係は明らかにできなかったが、覆土中から出土した遺物は、第1号井戸跡と併行する段階であった。

第763図 畝状遺構・風倒木跡全体図



第1号畝状遺構 (第764図)

I・J-11・12グリッドで確認した。

溝は浅く、覆土が地山に類似しており、確認作業で認識できなかったが、雨上がりに細い溝状のプランが薄く見えたことで、存在を明らかにできた。

六条並んだ溝を検出し、規模は長さ3.3m・10.06m・幅0.1m～0.3m・深さ0.03m～0.1mと細長かった。溝間は、1.2mであった。最南端の溝と、その北の溝の距離は、2.4mであったことから間にもう一本溝があった可能性を残した。

溝の長軸方向は、N-80°-Eで、第17・23・24区画溝、第31号溝とはほぼ平行していた。

住居跡や土塼との新旧関係は、明らかにできなかった。

第2号畝状遺構 (第764図)

J-14・15、K-14グリッドで確認した。

溝は浅く、覆土が地山に類似しており、確認作業で認識できなかったが、雨上がりに細い溝状のプランが薄く見えたことで、存在を明らかにできた。

七条並んだ溝を検出した。規模は長さ4.1m～13.2m・幅0.07m～0.32m・深さ0.03m～0.2mと細長かった。溝間は、1.4mであった。

溝の長軸方向はN-20°-Eで、第34号掘立柱建物跡棟行、第18・19号区画溝とはほぼ平行

していた。

住居跡や土塼との新旧関係は、明らかにできなかった。

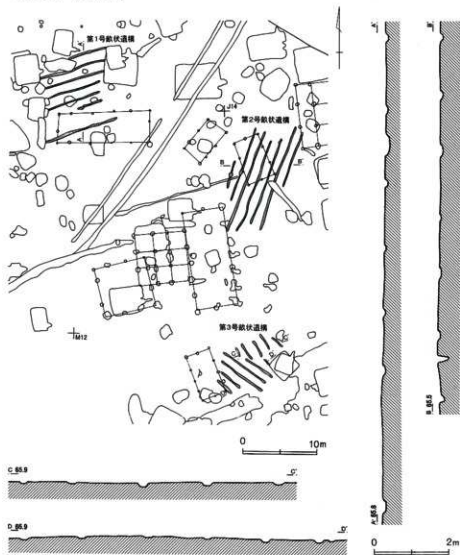
第3号畝状遺構 (第764図)

L-14、M-13・15グリッドで確認した。

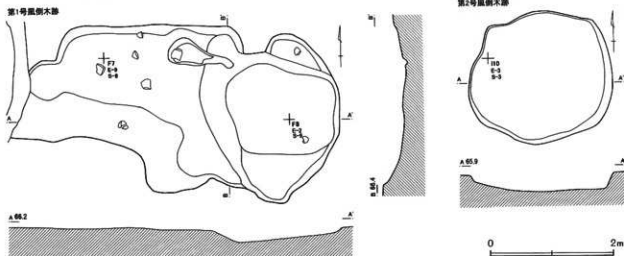
溝は浅く、覆土が地山に類似しており、確認作業で認識できなかったが、雨上がりに細い溝状のプランが薄く見えたことで、存在を明らかにできた。

十条並んだ溝を検出した。規模は長さ1.38m～7.4m・幅0.09m～0.22m・深さ0.03m～0.09mと細長かった。溝間は、1.3mであった。

第764図 畝状遺構



第765図 風倒木跡



東五条と西五条では、長軸方向が異なり、東はN-33°-W、西はN-54°-Wであった。

平行関係にある遺構はみられないが、第20号区画溝の手前で途切れていた。

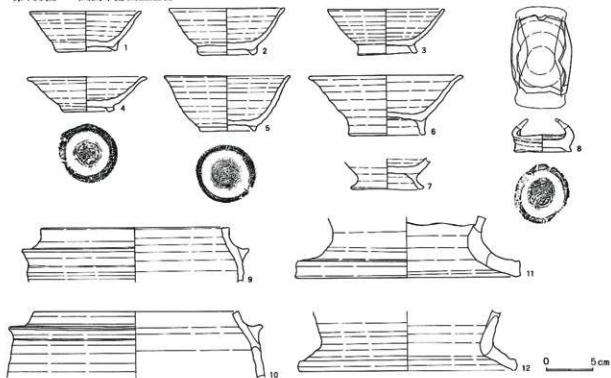
住居跡や土壇との新旧関係は、明らかにできなかった。

風倒木跡

中堀遺跡では、二カ所の風倒木跡を確認した。F-8グリッドとI-10グリッドの二カ所である。それぞれ重複するほどの遺構よりも新しかった。不整形の土壇状の落ち込みであった。

F-8グリッドの風倒木跡からは、遺物が出土した。1から7は、高台付椀である。1・4・5は、須恵

第766図 風倒木跡出土遺物



器 (NS) である。他は須恵器 (HS) である。8は、
須恵器 (HS) の耳皿である。7は底部のみである。
8は耳が次損している。

9・10は、羽釜である。9は須恵器 (NS)、10は

須恵器 (HS) である。11・12は、須恵器 (NS) の
甗である。9・10は胴部中位以下が次損している。11・
12は底部のみである。

第 637 表 風倒木跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	NS	11.9	4.2		5.0	B, E, G	良好		灰白	80	
2	高台付碗	HS	12.4	5.0		5.4	B, E, G, I	良好		にぶい橙	40	
3	高台付碗	HS	12.4	4.7		5.7	B, E, G	普通		にぶい黄	50	
4	高台付碗	NS	12.1	3.6		4.5	B, E, G	良好		灰白	50	
5	高台付碗	NS	13.4	5.8		5.7	B, E, G	普通		灰白	40	
6	高台付碗	HS	15.9	6.3		7.5	B, E	普通		にぶい橙	50	
7	高台付碗	HS				6.7	B, E, G	普通		にぶい橙	20	
8	耳皿	HS					C, E, G	良好		灰黄	70	
9	羽A I a 口	NS	19.7		29		B, E	良好		灰白	10	
10	羽A I a 口	HS	21.8		29		B, C, E, H	良好		浅黄橙	15	
11	甗	NS				23.3	B, E, H	普通		灰白	30	
12	甗	NS				22.7	B, F, H	良好		灰白	20	

(14) 小穴

調査区内の西と南に、多数の小穴を確認した。ここでは、掘立柱建物跡や欄列、土器埋設遺構など以外小穴について、概略を述べておくこととする。

小穴は、覆土の状態と掘り込み深さから調査時に、aからkに分類した。このうちd類は、浅い掘り込みに暗褐色の火山灰を含む覆土が、堆積していることから中世の遺構と判断した。その他は、大多数古代(平安時代)に属していた。

以下、遺物が出土した古代の小穴について述べることとする。

F-3のP2の1は、土錘である。

E-4のP7の1は、土錘である。P6の2は、土

錘である。

F-4のP12の1は、須恵器(NS)の羽釜である。P13の2は、土錘である。P22の3は、砥石である。1は胴部下位以下が次損している。

G-4のP50の1は、灰釉陶器の鉄鉢模倣土器である。P6の2とP24の3は、土錘である。1は口縁部のみである。

E-5のP2の1は、須恵器(S)の長頸壺である。P32の2は、土錘である。1は胴部中位以上が次損している。

E-6のP3の1は、は、灰釉陶器の高台付碗である。P5の1は、土錘である。1は底部が次損してい

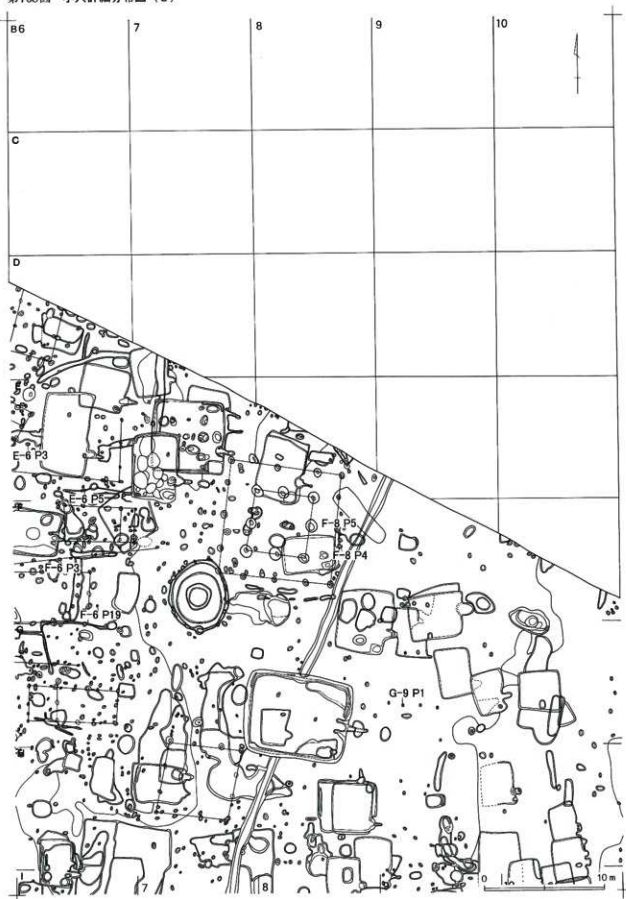
第638表 小穴出土遺物観察表

番号	器種	類別	口径	器高	鈎	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	皿	H	130	22		6.2	B, E, H	普通		淡 橙 白	70	J-14, P6
1	坏 A	IV	H	120	3.4	3.9	B, D	普通		淡 橙	80	Pit-5
1	坏 A	IV	H	130	3.1	6.3	B, D, E	普通		淡 橙	100	G-9, P1
1	坏 A	IV	H	120	3.4	6.8	B, D, E	普通		淡 橙	80	K-14, P6
1	坏 A	IV	H	120	2.7	7.1	B, E	普通		淡 橙	20	Pit-6
1	坏 A	IV	H	130	3.1	8.0	B, D	普通		淡 橙	20	F-8, P5
1	坏 B	H	120	4.1		5.7	B, E	普通		暗 橙	70	F-6, P19
1	高台付碗	HS	150	5.3		6.3	B, C, E	良好		にぶい橙	80	J-15, P17
1	高台付碗	HS	150	6.0		6.8	B, D, E	良好		橙	40	I-9, P1
1	高台付皿	K				7.7	B	良好		灰 白	50	H-12, P18
1	高台付皿	K	150				B	良好		灰 白	20	P-23, P2
1	高台付皿	K				7.0	B	良好		灰 白	60	T-7, P1, 底面へラ記号
1	高台付碗	K	120				B	良好		灰 白	15	E-6, P3, 被熱
1	高台付碗	K	140				B	良好		灰 白	25	L-13, P16, 被熱
1	鉄 頭 壺	K	130				B	良好		灰 白	30	P-17, P9
1	鉄 鉢 模 倣	K	220				B	良好		灰 白	5	G-4, P50, 被熱
1	高台付碗	NS				8.0	B, D, E	良好		灰 白	50	Pit-1 墨書
1	長 頸 壺	S				7.0	B, D, E, I	良好		灰	50	E-5, P2
1	大 甕	S					B, D, E	良好		青 灰	20	K-13, P2
2	皿	H	150	2.4		10.1	B, C, E	普通		淡 橙	90	G-9, P1
2	坏 A	IV	H	130	3.3	7.0	B, D, E	普通		淡 橙	60	I-15, P9
2	斐 A III b	H	180				B, D, E	良好		浅 黄 橙	15	J-15, P10
3	高台付碗	S					B, C, E	良好		青 灰	20	I-15, P10
3	砥 石											F-14, P22
4	蓋	HS					B, D, E	良好		浅 黄 橙	20	I-15, P10
1	坏 B	IV	H				B, D, E	普通		黄 橙	30	F-6, P3
1	高台付碗	NS					B, C, E	良好		灰 白	60	H-11, P12
2	羽A II a 口	HS					B, D, E	良好		浅 黄 橙	10	F-4, P12
2	坏 A	H					B, C	良好		橙	20	I-15, P9
1	坏 A	II	H				B, D, E	良好		橙	30	Q-19, P1

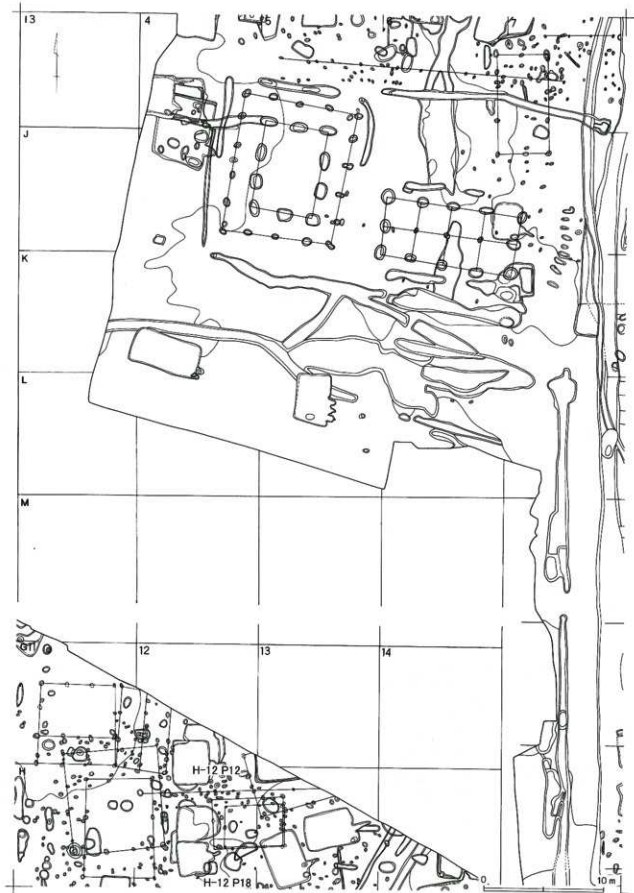
第767図 小穴詳細分布図(1)



第768図 小穴詳細分布図(2)



第769図 小穴詳細分布図(3)



第770図 小穴詳細分布図(4)



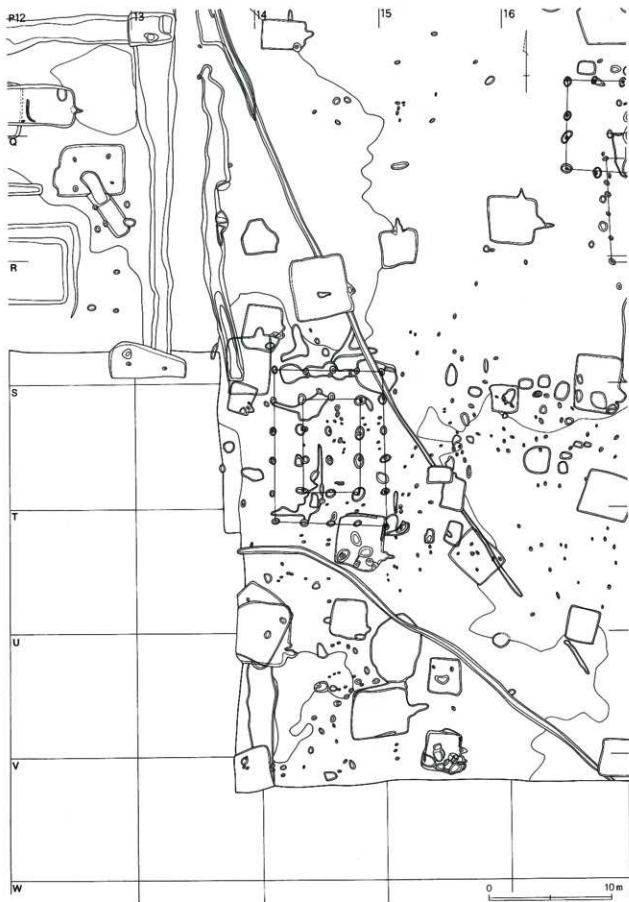
第771図 小穴詳細分布図(5)



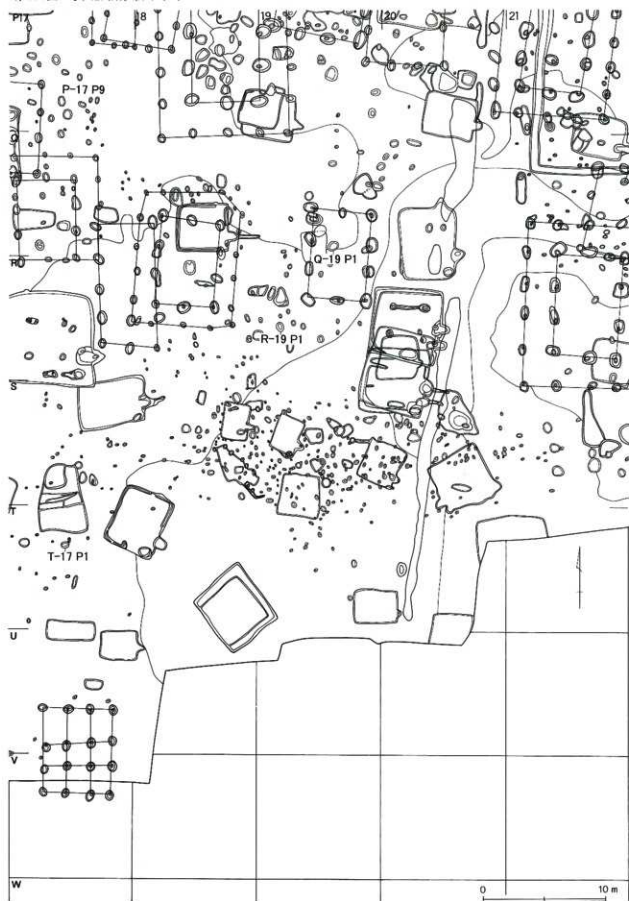
第772図 小穴詳細分布図(6)



第773図 小穴詳細分布図(7)



第774図 小穴詳細分布図(8)



第775図 小穴詳細分布図(9)



第776図 小穴詳細分布図(10)



第777図 小穴詳細分布図(11)



る。

F-6のP19の1とP3の2は、土師器の坏Bである。

F-8のP5の1は、土師器の坏ANである。P4の2は、土錘である。

G-9のP1の1は、土師器の坏ANである。P1の2は、土師器の皿である。

J-11のP5の1は、灰釉陶器の輪花付高台付碗である。

I-9のP1の1は、須恵器(HS)の高台付碗である。

H-12のP18の1は、灰釉陶器の高台付皿である。P12の2は、土錘である。

K-13のP12の1は、須恵器(S)の甕である。口縁部のみである。

L-13のP16の1は、灰釉陶器の高台付皿である。底部が欠損している。

K-14のP6の1は、土師器の坏ANである。底部が欠損している。

I-14のP2の1は、延板状鉄製品である。

J-14のP6の1は、土師器の皿である。P4の2は、棒状鉄製品である。

I-15のP9の1・2は、土師器の坏ANである。P10の3は、須恵器(S)の高台付碗である。4は、須恵器(HS)の蓋である。1・2は底部、4は口縁部が欠損している。3は底部のみである。

J-15のP17の1は、須恵器(HS)の高台付碗である。P10の2は、土師器の甕である。2は胴部中位以下が欠損している。

I-16のP2の1は、鉄釘。

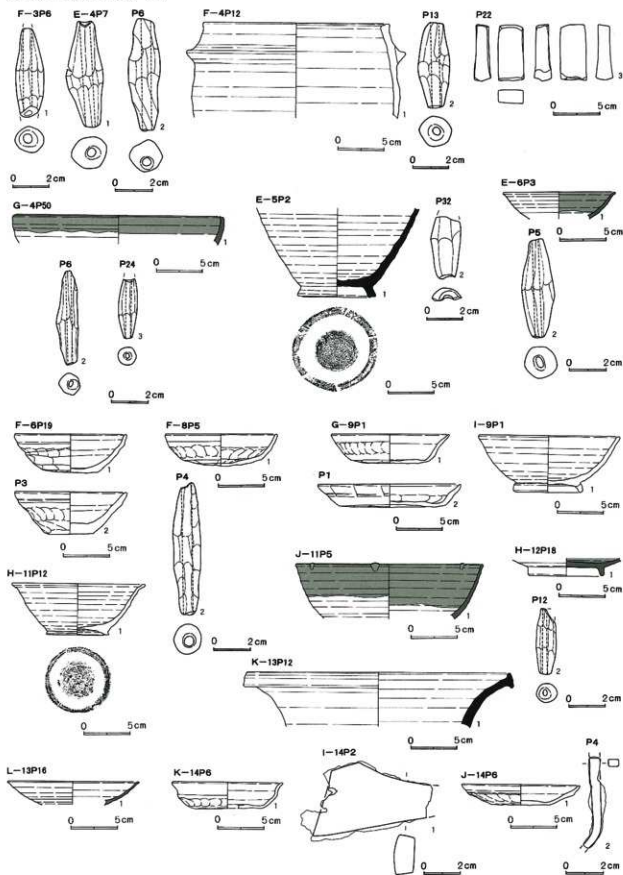
O-16のP2の1は、土錘である。

T-7のP1の1は、灰釉陶器の高台付皿である。底部内面にヘラ記号がみられる。判断できない。底部のみである。

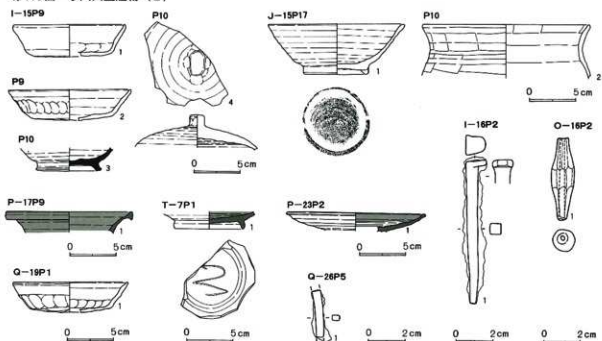
P-17のP9の1は、灰釉陶器の長頸壺である。口縁部のみである。

Q-19のP1の1は、土師器の坏ANである。底部が欠損している。

第778図 小穴出土遺物(1)



第779図 小穴出土遺物(2)



第639表 小穴出土土鐘観察表

番号	色	調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
1	灰	黄	100	5.7	1.9	0.5	13.5	C 1	I c	294	E-4, P7
1	灰	褐	70		1.5	0.4	8.2	C 1	I c	295	F-3, P6
1	にぶい	黄	100	4.4	1.2	0.2	4.8	C 2	I a	585	O-16, P2
2	褐	灰	100	5.9	1.8	0.5	12.7	C 1	I a	301	E-4, P-6
2	橙		90	4.5	1.7	0.5	10.5	C 1	I b	296	F-4, P-13
2	褐	灰	100	5.2	1.8	0.6	12.6	C 1	I b	297	E-6, P5
2	褐	灰	100	7.0	1.6	0.5	13.1	C 1	I b	299	F-8, P-4
2	橙		20				2.5	C 1	Ⅵ	298	E-5, P32
2	灰	褐	90		1.1	0.4	3.3	C 2	I b	587	H-12, R-12
2	橙		100	5.0	1.1	0.4	7.0	C 2	I c	586	G-4, P6
3	褐	灰	80		0.9	0.3	2.8	C 2	Ⅱ a	588	G-4, P74

P-23のP 2の1は、灰釉陶器の高台付皿である。

底部が欠損している。

Q-26のP 5の1は、棒状鉄製品である。

(15) 遺物包含層中の遺物

中堀遺跡は、現在の耕作土直下から遺構確認面にかけて、焼土・炭化物混じりの黒色土が、薄いとこで0.1m、厚いとこで1mの遺物包含層として確認できた。また遺物包含層の上面には、部分的に浅間山噴出のB軽石（天仁元年：1108年）が堆積しており、平安時代に形成された堆積層といえる。

この包含層中からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などの土器や、鉄製品・石製品など様々な遺物が出土した。

以下、各種類ごとの分布状況と、出土した遺物の概要について述べておきたい。なお第780図以下の上段には、小グリッドごとの各種遺物の包含状況を示す図、下段には、遺構から出土した当該種類の遺物の分布状況を示す図を掲載した。

a 9世紀の遺物出土状況

第780図は、9世紀代の遺物の出土状況を示した図である。下段のように9世紀代の遺構は、調査区全体に広く分布しており、大形の掘立柱建物跡や瓦葺き建物など数多く確認した。また竪穴式住居跡も多く、大形の竪穴式住居跡がみられるのも特徴の一つである。

包含層中の遺物もこの傾向を反映し、9世紀代の遺物の出土する様々なグリッドから遺物が出土した。とくに焼土層が、厚く堆積していた瓦葺き建物の区画や、大形の掘立柱建物跡の第50号掘立柱建物跡の周辺等に分布が集中する傾向にあった。

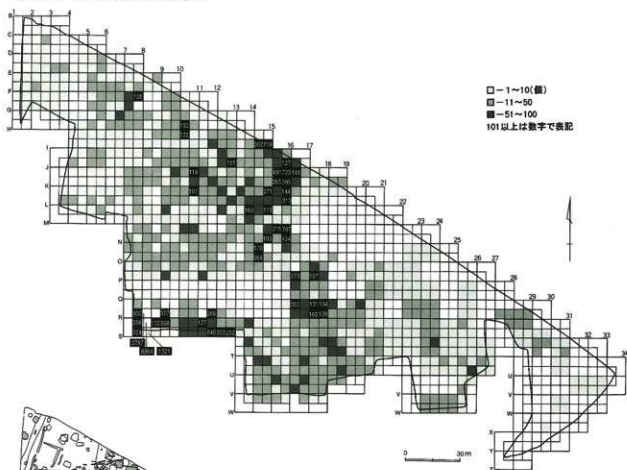
9世紀代の包含層中から出土した主な遺物について、次に記すこととする。

1から4は、土師器の坏Cである。1の底部外面には、墨書「南」がみられる。5から19は、土師器の坏

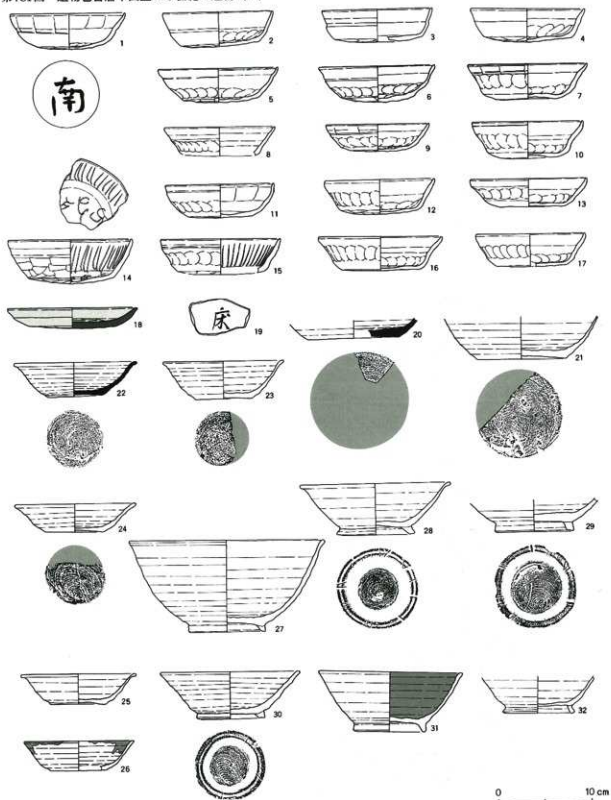
第640表 遺物包含層中出土の9世紀の遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	鈎	底径	胎	土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏	C	H	12.3	3.8	5.9	B, E, H		普通		淡 橙	80	墨書
2	坏	C	H	11.7	3.6	8.4	B, E, H		普通		淡 橙	70	
3	坏	C	H	11.7	3.4	9.3	B, E, H		普通		黄 橙	20	
4	坏	C	H	12.1	3.6	7.3	A, B, E, H		普通		淡 橙	40	
5	坏	A IV	H	12.8	3.6	5.8	B, E, H		普通		淡 黄 褐	80	
6	坏	A IV	H	12.2	3.8	3.7	B, E, H		普通		淡 橙	70	
7	坏	A VI	H	12.6	3.3	6.6	B, D, H		普通		淡 橙	100	
8	坏	A IV	H	11.8			B, E, H		普通		黄 橙	20	
9	坏	A	H	10.9	2.9	6.0	B, D, E, H		普通		橙	40	
10	坏	A IV	H	11.8	3.9	5.9	B, D, E, H		普通		淡 橙	40	
11	坏	A IV	H	11.6	3.6	5.9	D, E, H		普通		淡 橙	100	
12	坏	A IV	H	11.6	4.1	7.1	B, D, E, H		普通		淡 橙	50	
13	坏	A VI	H	12.4	3.0	6.9	A, B, E, H		普通		淡 橙	60	
14	坏(暗文)	H	13.2	4.7	9.0	B, D, E, H		良好		明	橙	20	放射状暗文
15	坏(暗文)	H	12.8	3.8	9.3	B, D, E, H		普通		暗	褐	20	放射状暗文
16	坏	A VI	H	13.1	3.6	8.2	B, D, E, H		普通		暗 褐	40	
17	坏	A VI	H	11.3	3.5	7.3	B, D, E, H		普通		淡 橙	30	
18	皿	H	13.7	2.2	9.1	B, E, H		普通		淡 橙	90		
19	坏	A	H				B		普通		淡 橙	5	
20	碗	S				9.8	B		良好		灰	5	
21	碗	NS				9.5	B, E		良好		灰 白	10	
22	碗	S	12.7	3.7	5.8	B			良好		灰	70	
23	碗	H S				B			良好		黄 橙	70	
24	碗	H S	12.7	3.0	6.4	B, E, I			良好		にぶい橙	70	
25	碗	H S	10.9	2.3	5.7	B, E			良好		透 黄 橙	70	

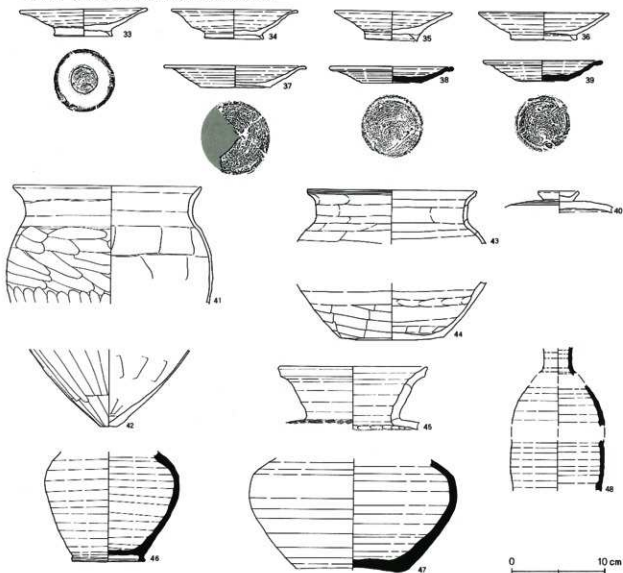
第780図 9世紀の遺物出土分布図



第781図 遺物包含層中出土の9世紀の遺物(1)



第782図 遺物包含層中出土の9世紀の遺物(2)



である。7・13は、坏AMである。14・15は、暗文土器である。ほかは、坏ANである。18は、土師器の皿である。19は、土師器の坏Aだが、内面に墨書「床」がみられる。

20から26は、碗である。20・21は、須恵器(S)である。21は、須恵器(NS)である。他は、須恵器(HS)である。27から32は、高台付碗である。30は、須恵器(S)である。27から29・34は、須恵器(NS)である。他は、須恵器(HS)である。33から36は、高台付皿である。33は、須恵器(HS)である。他は須恵器(NS)である。37から39は、皿である。37は

須恵器(NS)、他は、須恵器(S)である。

41から43は、土師器の甕である。44は、土師器の鉢である。45は、須恵器(NS)の壺である。46は、須恵器の長頸壺である。47は、須恵器(S)の壺である。48は、須恵器(S)のいよゆる壺か。

またQ-16・17グリッドでは、大量の土器が集中して出土した。焼土や炭化物とともに出土したが、具体的な遺構との関連は明らかにできなかった。ここから出土した主な遺物を第782図に掲載した。

Q-16・17グリッドから出土した遺物について記すこととする。

第641表 遺物包含層中出土の9世紀の遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
26	碗	HS	11.6	3.2		5.8	B, D, E	良好		黄 灰	40	
27	高台付碗	NS	20.6	9.7		8.0	B	良好		灰 白	50	
28	高台付碗	NS	15.9	5.4		7.3	B, D	良好	R	灰 白	10	底部-100, 惣-20
29	高台付碗	NS				8.1	B	良好		灰 白	10	墨書
30	高台付碗	S	14.7	5.0		6.6	B	良好		灰	90	
31	高台付碗	HS	15.1	6.3		7.1	B, E, G	良好		外-にぶい 内-灰	40	内面黒色処理
32	高台付碗	HS				7.1	B	良好		灰 黄	30	
33	高台付皿	HS	13.4	2.9		6.0	B, E, I	良好		にぶい黄橙	80	
34	高台付皿	NS	13.2	3.1		6.0	B, C, E, I	良好		灰 白	80	
35	高台付皿	NS	12.0	3.1		5.5	B, E, I	良好		にぶい黄橙	95	
36	高台付皿	NS	13.6	2.9		6.6	B, E, I	良好		灰 白	30	
37	皿	NS	14.9	2.3		7.6	B, D	良好		黄 灰	60	
38	皿	S	13.0	1.7		6.5	B	普通		灰 白	80	
39	皿	S	12.5	2.2		5.0	B	良好		灰 白	90	
40	壺	NS						良好		淡 白	20	
41	甕 A III b	H	19.9				B, D, E	良好		淡 橙	30	口縁部のみ
42	甕	H				1.9	B, D	良好		外-暗褐 内-淡橙	25	
43	甕 B II c	H	18.1				E, H, I	良好		外-暗褐 内-淡橙	20	
44	鉢	H				11.2	B, C, E, G, H	良好		橙	底部100 数 60	
45	壺	NS	15.6				B, H	良好		灰 白		頸部-100, 口縁上部-20
46	長頸壺	S				7.6	B	普通		青 灰	30	
47	甕	S					B	良好		青 灰	40	
48	壺 G か	S					B	良好		青 灰	20	部分的に被熱痕

1は、土師器の坏A Nである。2から5は、土師器の坏Cである。10は、土師器の高台付坏である。

6は、須恵器(HS)の碗である。体部内面口縁より墨書「床」がみられる。7は、須恵器(S)の碗である。8は、須恵器(NS)の高台付皿である。9は、須恵器(HS)の高台付皿である。11は、須恵器

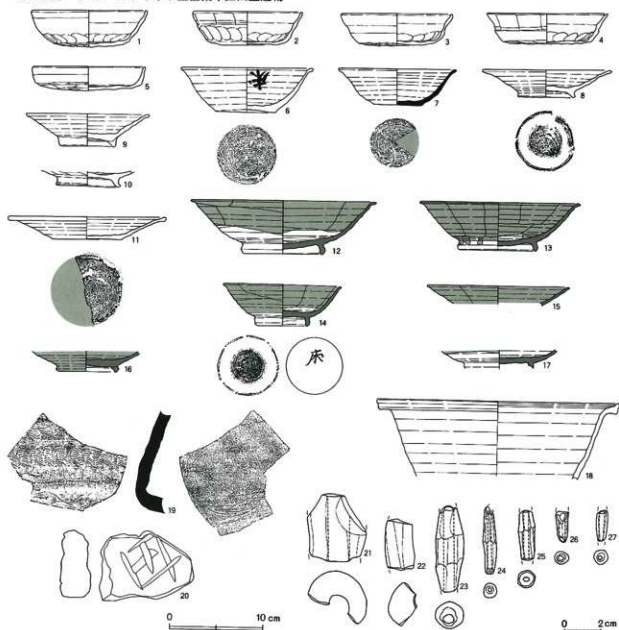
(NS)の皿である。

13から17は、灰釉陶器の高台付碗である。14の底部外面には、墨書「床」がみられる。18は、須恵器(NS)の鉢である。19は、須恵器(S)の大甕である。20は、凝灰岩の切石であり、「田」と刻まれている。21から27は、土鍾である。

第642表 Q16・17グリッド土器集中区出土遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A IV	H	12.2	3.9		7.4	B, E, H	普通		黄 橙	70	土器集中区
2	坏 C	H	11.6	3.6		5.7	B, C, E, H	普通		黄 橙	100	土器集中区
3	坏 C	H	11.7	3.4		8.0	B, E, H	普通		黄 橙	70	土器集中区
4	坏 C	H	12.8	3.2		9.4	B, E	普通		黄 橙	60	土器集中区
5	坏 C	H	12.0	2.6		8.5	B, E, H	普通		淡 橙	20	土器集中区
6	碗	HS	13.6	4.7		6.4	B, E, I	良好		灰 黄	90	土器集中区 墨書
7	碗	S	12.3	3.8		5.2	B	良好		灰	70	土器集中区
8	高台付皿	NS	13.5	2.9		5.8	B, E, G, I	良好		浅 黄	80	土器集中区
9	高台付皿	HS	12.8	3.4		5.6	B, E, I	良好		にぶい黄橙	50	土器集中区 Q-16-1, 2 SC-17 付近
10	高台付坏	H				6.6	B, E, H	普通		橙	30	土器集中区

第783図 Q16・17グリッド土器集中区出土遺物



第643表 Q16・17グリッド土器集中区出土遺物観察表 (2)

番号	器種	種別	口径	器高	踵	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
11	皿	NS	16.7	2.4		7.2	B, E	良好		灰 黄 褐	50	土器集中区
12	高台付碗	K	19.7	5.7		8.5	B, D	良好		灰 白	100 20	土器集中区
13	高台付碗	K	16.9	5.1		8.2	B, D	良好		外-オリーブ 灰 内-白	80	土器集中区
14	高台付碗	K	12.4	4.3		5.3	B, D	良好		外-灰白内- オリーブ灰	100	土器集中区 墨書
15	高台付碗	K	14.9			B		良好			20	土器集中区 被熱痕
16	高台付碗	K				6.1	B, D	良好		灰白 黄-灰 オリーブ	20	土器集中区 Q-16-1, 2 SC-17付近
17	高台付碗	K				6.5	B, D	良好		灰 白	50	土器集中区
18	鉢	NS	25.7				B, E, I	普通		灰 黄	10	土器集中区
	大 甕	S					B, E	良好		青 灰	5	

第644表 Q16・17グリッド土器集中区出土土鉢観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
21	にぶい黄橙	20				14.9	A 1	Ⅲ	27	
22	橙	20				9.4	A 1	Ⅲ	28	
23	にぶい黄橙	80		1.5	0.6	7.7	C 1	I b	300	
24	にぶい橙	90		0.7	0.2	1.6	C 3	I c	726	
25	橙	60		0.9	0.3	1.8	C 2	Ⅲ	589	
26	にぶい橙	20		0.7	0.2	0.6	C 3	Ⅲ b	727	
27	にぶい橙	20		0.8	0.2	0.8	C 3	Ⅲ a	728	

b 10世紀の遺物出土状況

第784図は、10世紀代の遺物の出土状況を示した図である。下段のように10世紀代の遺物は、調査区の西に集中して分布しており、小形の竪穴式住居跡が中心となるのが特徴である。

包含層中の遺物もこの傾向を反映し、10世紀代の遺物は、調査区の西のグリッドに集中して出土した。

包含層中から出土した10世紀代の主な遺物について次に記す。

1から13は、土師器の坏Bである。14は、土師器の高台付坏である。

15から28は、高台付碗11から21・27は、須恵器(N

S)である。他は須恵器(HS)である。16の体部外面の口縁部よりには、墨書「田」がみられる。17の底部外面には、墨書「南」がみられる。18の底部外面には、墨書「床」がみられる。29は、黒色土器の高台付碗である。30は、須恵器(NS)の高脚高台付碗である。31から36は、碗である。31・32・34は、須恵器(HS)である。他は、須恵器(NS)である。37は、須恵器(NS)の蓋である。

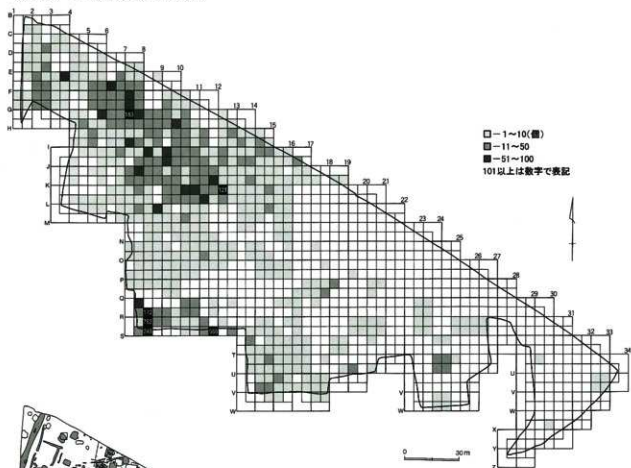
38は、土師器の甕である。39は、須恵器(S)の鉢である。40は、須恵器(S)の甕である。

41は、土師器の甕である。42は、須恵器(NS)の碗である。底部外面にヘラ書きで「+」がみられる。

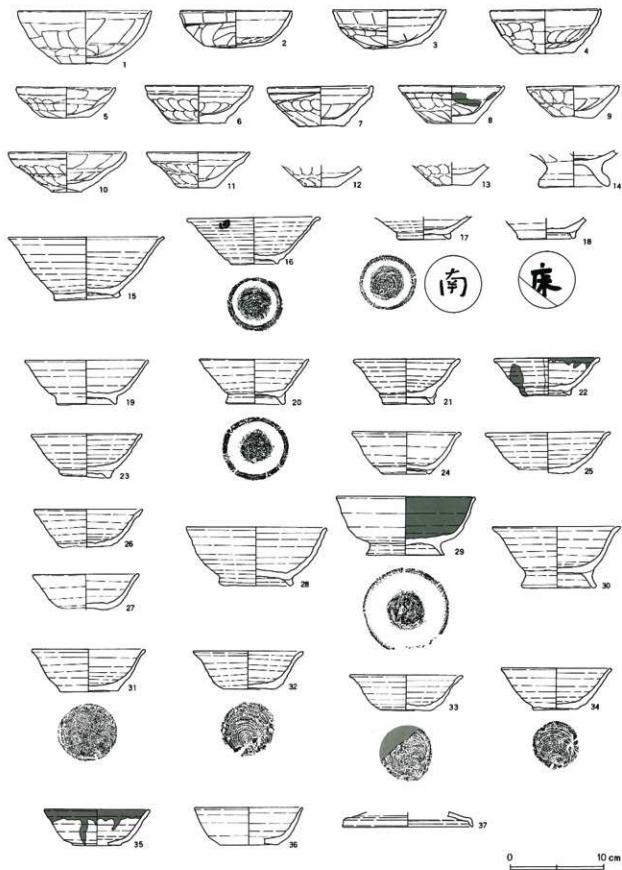
第645表 遺物包含層中出土の10世紀の遺物観察表(1)

番号	器種	種別	口径	器高	胴径	底径	胎土	焼成	備註	色調	残存	出土位置その他
1	坏	B	H	14.0	5.5	4.9	B, E	普通		淡橙	70	
2	坏	B	H	11.8	3.8	6.1	B, E, H	普通		暗橙	70	
3	坏	B	H	11.9	4.1	4.9	B, D, E, H	普通		暗橙	100	
4	坏	B	H	11.8	4.7	5.6	B, D, E	普通		赤褐	70	
5	坏	B	H	10.2	3.2	4.8	B, C, E	普通		橙	60	
6	坏	B	H	11.4	4.0	5.7	B, C, E	普通		橙	90	
7	坏	B	H	11.1	4.2	5.0	B, D, E, H	普通		暗橙	80	
8	坏	B	V	H	11.1	4.0	5.1	B, D, E	良好	淡橙	70	
9	坏	B	V	H	9.7	3.4	4.3	B, E	普通	明橙	20	
10	坏	B	V	H	12.3	4.2	3.2	B, D, E	普通	淡橙	30	
11	坏	B	H	10.8	3.8	3.6	B, D, E, H	普通		橙	50	
12	坏	B	V	H		3.6	B, D, E, H	普通		暗橙	20	
13	坏	B	V	H		4.0	B, D, E	普通		暗橙	20	
14	高台付坏	坏	H			7.2	B, D	普通		橙	40	
15	高台付碗	HS	16.4	6.8	6.3	B, E, I	良好		橙	70		
16	高台付碗	HS	13.8	4.9	4.8	B	良好		灰白	50	墨書	
17	高台付碗	HS			5.2	B, E, F, H	普通		淡黄	10	墨書	
18	高台付碗	NS			5.6	B, E, H	良好		灰白	40	墨書	
19	高台付碗	NS	13.0	4.7	6.0	B, I	普通		灰黄	50		
20	高台付碗	NS	11.3	4.7	5.7	B, E	普通		灰白	70		
21	高台付碗	NS	12.7	3.7	5.3	B, E, I	普通		淡黄	60		
22	高台付碗	HS	11.2	3.9	4.4	B, E, G	良好		にぶい橙	80		

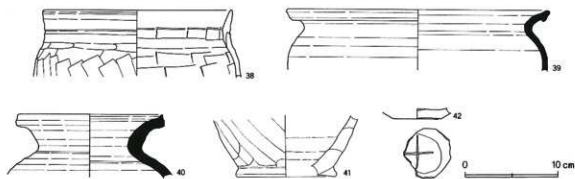
第784図 10世紀の遺物出土分布図



第785図 遺物包含層中出土の10世紀の遺物(1)



第786図 遺物包含層中出土の10世紀の遺物(2)



第646表 遺物包含層中出土の10世紀の遺物観察表(2)

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	釉	色調	残存	出土位置その他
23	高台付碗	HS	11.7	4.6		4.5	R, E	良好		にぶい黄	60	
24	高台付碗	HS	11.1	4.4		4.8	B, D, E	良好		黄 灰	70	
25	高台付碗	HS	13.2	4.8		4.5	B, E, I	普通		淡 黄	20	緑青(銅)付着
26	高台付碗	HS	11.6	4.4		4.6	B, E, I	良好		にぶい黄	ほぼ100	
27	高台付碗	NS	11.1				B, E	良好	R	外-灰白、 内-黒	70	
28	高台付碗	HS	14.8	6.2		7.1	B, E, G	普通		黄 灰	50	N-9-3
29	高台付碗	黒色	14.7	6.2			B, D, E, H	普通		淡 黄	40	内面黒色処理
30	高脚高台付碗	NS	13.0	6.5		7.5	B, D, E	良好	R	灰 白	50	口縁-50、底部-100
31	碗	HS	12.1	6.2		4.4	B, E, G, I	良好		灰 黄 橙	75	
32	碗	HS	11.6	4.0		5.6	B, E, G	良好		浅 黄 橙	40	
33	碗	NS	11.8	3.7		5.3	B, E, G	良好		黄 灰	60	
34	碗	HS	11.7	4.4		5.0	B, E, G	良好		淡 黄	60	
35	碗	NS	11.0	3.9		5.2	B, D, E	良好		浅 黄	30	
36	碗	NS	11.4	4.0		6.2	B	良好		灰 白	25	
37	盞	NS	13.7				B, C	普通		灰 白	5	
38	甕 A III c	H	20.2				B, D, E	良好		黄 橙	30	
39	鉢	S	27.6				B	良好(硬質)		青 灰	10	
40	甕	S	15.4				B, D, G	良好		青 灰	15	
41	瓶	H				10.1	B, D, E	良好		淡 橙	20	
42	碗	NS				5.2	B, D, E, H	良好		浅 黄 橙	60	底部外面へラ記号

c 灰釉陶器・緑釉陶器・白磁・黒色土器

遺物包含層中から出土した灰釉陶器・緑釉陶器・白磁・黒色土器について述べたい。

灰釉陶器

灰釉陶器は、中堀遺跡の各所で出土しているが、第787図下段は、灰釉陶器の出土した遺構を拾い上げた図である。遺跡内を東西に分割した場合、東側に比較して西側に、濃密な灰釉陶器の分布を伺うことができる。

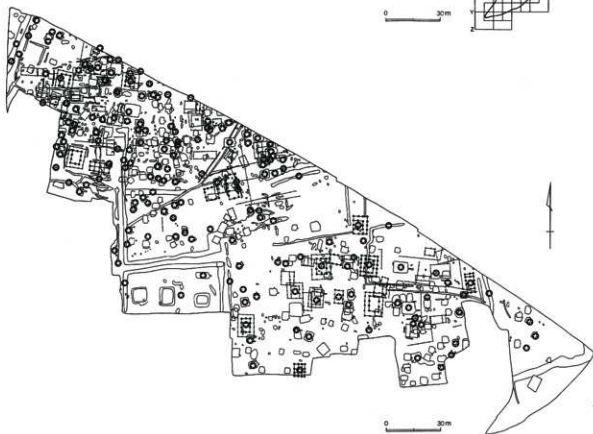
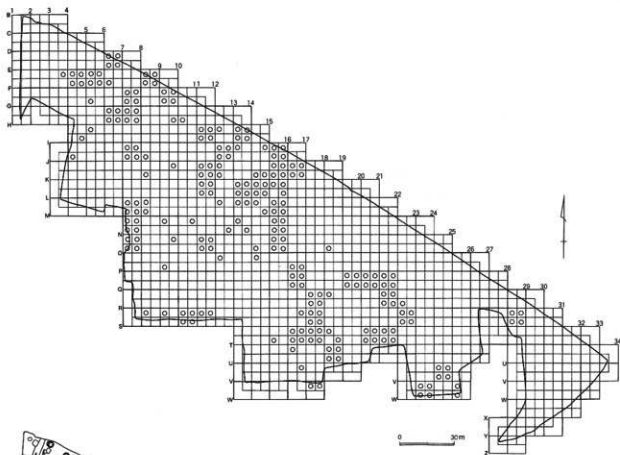
ことに第53号住居跡の周辺は、大変濃密に分布している状況を知ることができる。

これを同図上段の「被熱された灰釉陶器」の分布図と比較すると、明瞭に分布が重なる傾向にあることが分かる。

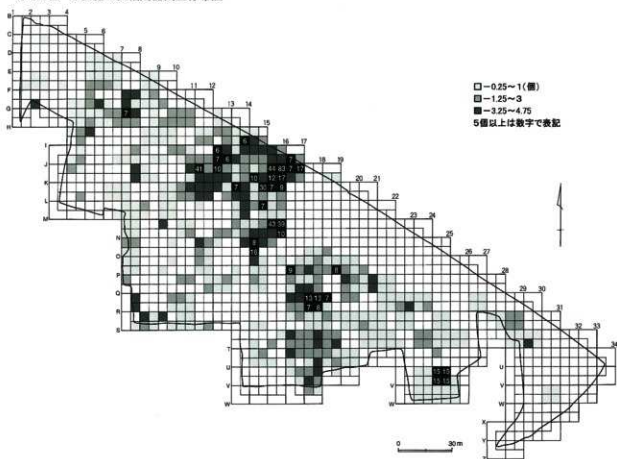
「被熱された灰釉陶器」は、遺物包含層中の焼土や炭化物などを含む黒色土中から出土した遺物である。

この焼土の形成は、後に考察するように灰釉陶器の黒笹90号窯式の後半段階の火災によって形成された層であり、「被熱された灰釉陶器」の分布は、火災範囲

第787図 被熱された灰軸陶器出土分布図（上）と灰軸陶器の出土遺構（下）



第788図 9世紀の灰釉陶器出土分布図



をある程度示すと考えられる。

第788図は、遺物包含層中から出土した9世紀段階（黒笹14・90号窯式）の灰釉陶器の出土状況である。グリッドを4分の1分割した小グリッドごとにどの程度の灰釉陶器が出土しているか、破片数量を濃淡で表現した。

第789図は、9世紀の灰釉陶器である。1から3は、高台付椀である。1は、D-5-4、2は、F-4-2、3は、G-6-4から出土した。

4から8は、高台付皿である。4は、S-18-4、5は、R-20-2、6は、(旧) S J 78、7は、C-4-3、8は、K-16から出土した。

9・10は、段皿である。9は、Q-22、10は、D-6-3から出土した。

11は、長頸壺である。11は、J-15-2でそれぞれ出土した。

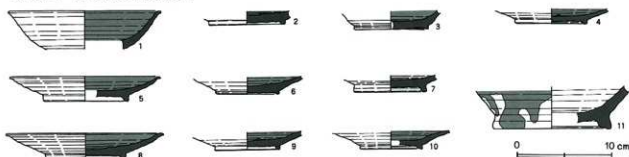
第790・791図は、黒笹90号窯式の灰釉陶器である。

1から19は、高台付椀である。1は、J-15-1、2は、S J 77、3は、G-10-3、4は、J-15-1、5は、J-15-1、6は、J-15-2、7は、T-24-1、8は、SK-222、9は、J-15-2、10は、J-16-2、11は、F-8、12は、J-15-2、13は、J-11-1、14は、J-15-2、15は、J-16-3、16は、I-16-3、17は、R-16-2、18は、I-15-4、19は、J-15-3から出土した。

20から33は、高台付皿である。20は、J-15、21は、J-15-3、22は、M-12-4、23は、J-15、24は、U-17、25は、O-16-2、26は、J-15-4、27は、O-17、28は、O-17、29は、P-17-2、30は、V-24、31は、M-15-2、32は、J-15-2、33は、I-12から出土した。

34・37から40は、段皿である。34は、(旧) S J 8、37は、(旧) SK-222、38は、G-10-3、39は、H-5-1、40は、T-15-2から出土した。

第789図 9世紀前葉の灰釉陶器



35・36は、輪花付段皿である。35は、J-12-4、36は、H-13-4から出土した。

41から53・58は、高台付碗から高台付皿である。41は、G-10-4、42は、I-14-4、43は、J-12-1、44は、E-8-1、45は、J-14-3、46は、R-14-2、47は、R-11-3、48は、M-14-3、49は、J-7-2、50は、J-11-3、51は、M-15-2、52は、J-14-4、53は、G-4-3、58は、M-15-3から出土した。

54から57は、耳皿である。54は、F-7-2、55は、F-7、56は、O-12-1、57は、J-10-2から出土した。

59から62は、蓋である。63・65から67・69は、長頸壺である。59は、N-14-1、60は、H-5-1、61は、P-21、62は、V-23から出土した。

64は、広口壺である。64は、M-15-4から出土した。

68・70は、手付瓶である。から出土した。68は、M

-15-4、70は、F-5-1から出土した。

71は、平瓶である。71は、I-12から出土した。

第788図は、遺物包含層中から出土した9世紀段階（黒笹14・90号窯式）の灰釉陶器の出土状況である。グリッドを4分の1分割した小グリッドごとにどの程度の灰釉陶器が出土しているか、破片数量を濃淡で表現した。

ことに9世紀代の灰釉陶器が、集中して出土したのは、①第12号区画溝の周辺、②第40号掘立柱建物跡の周辺、③第50号掘立柱建物跡の周辺、④第4土壌群の周辺、⑤第66号掘立柱建物跡の周辺である。

①第12号区画溝の周辺は、瓦葺き建物地跡や、第1・2号建物跡を抱え、これらで使用された遺物が第12号区画溝周辺に廃棄されたため、この遺物包含層から多量に出土したと考えられる。

②第40号掘立柱建物跡の周辺は、遺構確認面までの間に大量の焼土・炭化物混じりの遺物包含層が確認でき、この中から灰釉陶器が出土した。ただし灰釉陶器

第647表 9世紀前葉の灰釉陶器観察表

番号	器種	種別	口径	器高	胴	底径	胎土	焼成	釉層	色調	残存	出土位置その他
1	高台付碗	K	15.9				B, D	良好		灰 白	20	被熱?
2	高台付碗	K				7.6	B, D	良好		灰 白	10	
3	高台付碗	K				7.6	B, D	良好		外-灰白 内-青 オリーブ灰	40	
4	高台付皿	K				7.1	B, D	やや不良		淡 灰 白	30	
6	高台付皿	K				6.5	B, D	良好		灰 白	20	
7	高台付皿	K				7.4	B, D	良好		灰 白	10	
8	高台付皿	K	16.0	2.7		7.5	B	良好		灰 白	底面60 他 10	
9	段 皿	K				6.5	B	良好		灰 白	10	
10	段 皿	K				6.5	B	普通		灰 白	10	
11	長頸壺	K				11.9	B, D	良好		灰 白	10	